



Title	Gallia 59号 HOMMAGES
Author(s)	
Citation	Gallia. 2020, 59, p. 93-151
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/77097">https://hdl.handle.net/11094/77097</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## 研究者として、教員として

青木 佑介

私にとって、和田先生は教員として、そして研究者として目標とする先生である。先生のように、教員として学生を自発的な思考へといざなう指導を行い、研究者としてテキストと真摯に向き合う姿勢を持てるようになることを目指している。

先生の授業では、学生を自発的な思考へといざなう指導を学んだ。それは多角的な視点からテキストを検討することの面白さである。ブルーストの『失われた時を求めて』の精読の授業では、テキストを正確に読むだけでなく、テキストに見られる文化的な事象に目を向け、それらの情報を通してテキストを見直す面白さを学んだ。絵画を参照する機会が多かったが、その他にも服飾、汽車、旅行、紅茶とその飲み方の歴史（ミルクティやレモンティの起源）などを調べ、それらを訳と併せて検討した。関連資料を調べることで、テキストの解釈の幅が広がってゆくのはやはり面白い。私は今年度から教員として働き始めたのだが、学生が自発的に学ぶ姿勢を持つようになる授業を心がけている。

他方、和田先生には、研究者としてテキストと向き合うとは、フランス語を正確に読むだけでなく、テキストに見られる一つ一つの情報を丁寧に読み取り、それらを整理し分析することだ、と教えていただいた。和田先生はテキストや草稿をととても丁寧に読み、そこから一つ一つ情報を抜き出すとともに、それらをとても上手に整理される。特に、草稿を検討する際、テキストが書かれた順番、書き換えの意図を巡る分析は精緻である。私自身も草稿に関心をもち、テキストを読む際に草稿を参照するのだが、つい決定稿の解釈の可能性を広げることを考えてしまい、草稿に残された情報を整理し、書かれた順番、書き換えの意図を推察するところまで至っていない。先生のように、テキストを丁寧に読み、情報を整理することで、より精緻な分析を行った論文が書けるようになることを研究者として目標にしている。

(大谷大学任期制助教)

## モーパッサンとの二度の出会いに感謝

足立 和彦

たしか学部三年生の時の和田先生の演習で、「Le Fantastique」と題するモーパッサンの一文を読みました。形容詞に定冠詞が付くことで名詞化して「～なも

の」となるということを、その時に初めて学んだことを覚えています。が、それよりなにより、その授業こそが、私が今も研究を続けるモーパッサンとの最初の出会いとなったのです。その時は、脱線にししか見えない話の展開にとまどい、頑張って読んでもよく分からない「落ち」で終わっていて、モーパッサンはこんなものかと、なんだか拍子抜けしたような記憶もあるのですが、しかし今になって思えば、まだフランス語をろくに分かっていなかった私に丁寧に文法を教えていただいた、あの和田先生の授業がなかったら、そしてそこでモーパッサンと出会っていなければ、今の自分はなかったのではないかと思います。

その後、恥ずかしながら学部生のままに五年目を迎えた年のことです。卒論にモーパッサンを取り上げることに決めていた私は、大学院の授業で和田先生がモーパッサンを扱っていらっしゃることを先輩から教わりました。恐る恐る、授業に出席させていただけますかとお願いしてみると、先生は快く迎えてくださっただけでなく、なんと私にも発表を受け持たせてくださったのです。その演習はモーパッサンの短編を発表順に一編ずつ読んで、作品の構成や語りの人称などを分類・分析していくものでした。私にとって初めての本格的な文学研究は、やはり和田先生の授業、そしてモーパッサンの短編小説が題材だったのです。毎回の授業に、ドキドキ、わくわくしていた気持ちを今でも忘れません。そしてこの経験が、その後、私がモーパッサンを研究しつづけてゆく重要なきっかけとなったのはもちろんのことです。当時のことを懐かしく思い出すと同時に、未熟な学生を寛大な心で受け入れ、そして優しくご指導くださった和田先生に、深く感謝を申し上げます。

和田先生の授業を通して、テキストを正確かつ丁寧に読むことの重要さはもとより、一見当たり前と見過ごしてしまいそうなことにも目を留め、一つずつ確認してゆくことを怠らなければ、次第に広い展望が見えてくるということを学ばせていただきました。そのことをいつも心に留め、日々の研究の指針としてどうかこれまでやって参りました。

和田先生が大阪大学をご退職される日が来たということをまだ信じられない思いですが、これまで長くにわたって温かくご指導いただいたことに、心よりお礼を申し上げます。そして、先生のご健康と、これからのますますのご活躍を祈念いたします。

(名城大学准教授)

## 和田先生との思い出

安達 孝信

和田先生の授業を始めて受けたのは、専修選択が間近に迫った2009年の秋だっ

た。英米文学、ドイツ文学と共同で行なったこの一回生向けの授業で、和田先生は『失われた時を求めて』の第1巻を課題図書に指定され、プルーストの長くうねった「印象派的特徴」を持つ文章を、モネの睡蓮画との関連で解説されたように記憶している。ただ無闇に長く、冗長に思われた文章は、先生の解説を聞いた後では、緻密に構成され一部の間もないものに様変わりしていた。我流での読書の限界を痛感した私は、その半年後に仏文研究室の門を叩くことになった。

ところが入ってみるとプルーストの演習は院生以上が対象であり、神秘への扉はまだ数年固く閉ざされていることがわかった。学部の間はスタンダール、アラゴン、カミュといった19世紀から20世紀にかけての作家たちの小説を読んでいった。ここでは文法理解を厳しく鍛えられ、涼しい顔で「条件法過去第二形です」と言えるようになることが皆の第一目標だった（もちろん実態は、接続法大過去などという奇妙なものが出て、かつ先生から質問を振られた時には、呪文のようにそう答えるという伝統を代々継承していただけなのだが）。

四年生になりプルースト演習に潜るようになってからは、毎週の授業が待ち遠しくなった。最初のうちは、太刀打ちできない文章ばかりで、授業直前になって図書館に走り、薄目で翻訳を一瞥した後、担当訳文を仕上げるということもよくあった。訳文の検討の後、解釈や時代的コンテクストに関する議論が始まると、先生の誘導質問に食らいついていくのが何よりも面白かった。この授業で私は、精読の仕方、そして研究の糸口の見つけ方を学んでいった。先生のこの手法はその後の研究発表の際にも共通しており、何気ない口調で尋ねられたことを掘り下げていくとそこにはいつも鉾脈が見つかった。

とはいえ私にとっては、和田先生といえばなんといっても毎夏の仏文合宿である。場所は琵琶湖に、白石島、直島、小豆島に、亀岡、奥猪名へと移り変わり、学生の顔ぶれも一度として同じものはなかった。それでも10年間に渡って、そこに同じ空気が流れていたのは、ひとえに仏文研究室そのものが、薄暗い無機質な場所として存在していたのではなく、夏合宿の夜の、誰よりも真剣に無邪気到大富豪を楽しむ、破顔大笑の和田先生を中心軸として構築されてきた共同体であったからだろう。その一員であることを私はとても誇らしく思う。

(大阪大学博士後期課程在学中)

## Le côté de Handai

Éric Avocat

Mais c'est surtout comme à des gisements profonds de mon sol mental, comme aux terrains résistants sur lesquels je m'appuie encore, que je dois penser au côté de Méséglise et au côté de Guermantes. C'est parce que je croyais aux

choses, aux êtres, tandis que je les parcourais, que les choses, les êtres qu'ils m'ont fait connaître, sont les seuls que je prenne encore au sérieux et qui me donnent encore de la joie.

Marcel Proust, *Du côté de chez Swann*, «Combray»

Mes tribulations professionnelles au Japon m'ont procuré le privilège d'appartenir successivement à deux places fortes de la *Recherche*, d'en connaître de l'intérieur deux postes avancés, situés aux confins géographiques du monde proustien, mais aussi en l'un de ses centres académiques, dans l'intense proximité de son cœur battant. Le fil de cette métonymie (puisqu'il est bien entendu question de la recherche menée par les spécialistes de Proust, et de la communauté qu'ils forment) court de l'Université de Kyoto à l'Université d'Osaka. Il déroule les étapes d'un *cursus (honorum)* qui m'aura associé en étroite intelligence et vive sympathie à deux collègues hors de pair : *du côté de Kyodai*, Kazuyoshi Yoshikawa, puis Akio Wada, *du côté de Handai*. D'un *futsibun* l'autre, près de quinze ans de ma vie ont pris forme dans les mailles de ce réseau d'institutions d'excellence et de prestige, où s'est aussi tissée la trame secrète d'un cheminement très personnel. L'arrivée à Kyoto est pour moi indissolublement mêlée au grand roman de Proust, dont j'avais différé jusqu'alors la lecture intégrale, peut-être par une sorte de prescience tacite, afin qu'elle coïncidât avec cette désorientation majeure, peuplât de ses figures innombrables la solitude transitoire du déracinement, et fit vibrer de sa formidable aventure les plaisirs et les jours de ce lieu inconnu, à la recherche du temps perdu – dans les affres de la thèse dont j'émergeais à peine. C'est ce *beau livre écrit dans une sorte de langue étrangère*, les études proustiennes n'étant auparavant pas mon genre, qui m'enracina dans la quiétude mystérieuse et parfois rétive de Kyoto. Ce ne fut pas seulement le travail de l'œuvre, le retentissement de la lecture dans les profondeurs de l'imaginaire et de la mémoire, mais aussi son prolongement, la conséquence de son affleurement dans la vie quotidienne des amitiés, des conversations, du travail universitaire, avec les étudiants, les amateurs, les spécialistes de tous horizons – et la figure d'Akio Wada imprime sur ce portrait de groupe le relief délié de son élégance, morale, intellectuelle, colorant toute sa manière d'être (je renvoie à l'évocation si juste qu'en trace dans ce même volume Agnès Disson, à qui j'ai succédé sur le côté de Handai).

Il y aurait une étude comparative à faire sur les cartographies des mondes fictionnels et des champs de recherche qui se structurent autour d'eux. Les côtés de Kyodai et de Handai forment à la fois un *analogon* et une image inversée des deux côtés qui partagent les promenades des habitants de Combray : nulle «distance» irréductible, nulle «démarcation» infranchissable,

n'isolent l'une de l'autre ces deux «entités» – ou en tout cas ne compliquent leurs rapports : entre elles, les êtres, les idées, les *tuyaux* professionnels, circulent dans la transparence et l'harmonie les plus fluides. Pareille osmose ne peut être cependant tenue pour spontanée : c'est le fruit d'une action concertée, où Akio Wada a une part essentielle. Dans les matières pointues de la recherche, dans la pratique exigeante et bienveillante de l'enseignement, dans la vie studieuse et joyeuse de la petite communauté humaine d'un département de littérature française, le mélange de rigueur et de finesse qu'il met en toute chose n'a pas fini de faire merveille. Je rends grâce au destin, et à ses deux figures tutélaires qui encadrent le seuil de ma vie japonaise, MM. Yoshikawa et Wada, de m'avoir permis d'en porter témoignage aujourd'hui.

(Professeur associé, département de littérature française, Université d'Osaka)

## 和田先生の思い出と、感謝の気持ち

安藤 麻貴

1996年初春、大学院の入試の面接試験で初めてお目にかかったときの先生の印象、温厚な雰囲気、眼鏡の奥に光る鋭い眼差しを、あれから23年になる今もよく覚えています。親しみやすく、ユーモアがあって、明るいお人柄の一方で、研究に関しては厳格な実証主義を貫かれていて、先生に原稿や論文を見ていただくときには、いつも背筋が伸びる思いをしてきました。

しかしながら、私自身に限らず、学生時代、ほかの方の研究発表の際にも感じておりましたが、先生は常に批判ではなく、良い部分を汲み取る場所からご批評を述べられていて、それは、私のように日々手探りで研究をする身としては、これ以上ない励みとなりました。これまで研究を続けることができたのは、先生のご姿勢に導かれるところが大きかったです。

先生の思い出はたくさんあり、どれかを選ぶということは難しいのですが、一つは、柏木先生のご退職記念シンポジウムで、20世紀の小説の冒頭句について、和田先生と登壇するという貴重な機会を与えていただいた時のことです。徐々に自分の番が近づき、広い会場を埋め尽くす聴衆とその熱気に心臓はバクバク。いざ立とうとした瞬間、隣の和田先生の気配を感じたので、耳を傾けたら、「安藤さん、時間が押してるからよろしくね」と極めてクールにおっしゃいました。緊張がピークに達していた私は、その一言で一気に現実に戻され、おかげさまで、冷静になりました（しかし、早口で読まねばというプレッシャーは絶大でした）。

もう一つは、留学中、幸運にも、同じ時期にパリに滞在していらっしゃった和

田先生のお宅に深川さんと夕食に招待していただいた時のことです。いつも背広できっちりとした印象の先生が、ラフな装いで出迎えてくださり、それだけでも新鮮でしたが、もっと驚いたのは、食卓に並べられたお皿に、一人一尾ずつ大きなオマール海老が赤い鉄をむき出しにして鎮座していたことです。あれほど贅沢にオマール海老をいただいたのは、後にも先にもありませんでした。先生、その節はありがとうございました。

個人的なことで恐縮ですが、これまで私は、出産、子育てという局面で、研究活動から遠ざかったことがありました。短くはなかったその期間、先生は辛抱強く見守ってくださり、さらに有難いことに、研究発表の機会を授けてくださいました。二年前のその発表がなければ、私は日々の生活に流されて、今も研究活動を再開できていなかったと思います。どのような時も、常に励ましのお言葉をくださった先生には、ただただ感謝の気持ちしかありません。先生に師事することができた幸福を胸に、これからも研究の道を志したいと心に誓っています。

先生、長きに渡り、ご教導くださいまして、誠にありがとうございました。

(高知大学非常勤講師)

## 親愛なる「和田くん」へ

石井 啓子

和田章男さんに初めてお会いしたのは、もう 40 年も前のこと。昭和 53 年に仏文科の修士課程に入学した学生はふたりだけでした。唯一の「同級生」となるのは、さてどのような方なのか？ いかにもインテリ然とした、堅苦しい、気難しい、無口な方だったらどうしよう・・・そんな危惧の念は、瞬時に吹き飛びました。目の前に現れた「和田くん」は、大阪外大（今ではひとつの大学になりましたが）ご出身の好青年。今も変わらぬあのつぶらな(?) 瞳と、はじけそうな笑顔の持ち主で、礼儀正しい京都風のアクセントで発せられる言葉は、思いやりと周囲への気遣いに溢れていました。また、明確なヴィジョンもなく、とりあえず大学院進学を決めた私に対して、和田さんはその時点で、すでにブルースト研究に人生の目標を定めていらしたようで、大いに刺激を受けました。

秋にはフランスに出発することが決まっていたので、「和田くん」とご一緒させていただいたのは、じつは大学院一年の前期半年間だけでした。ラテン語に頭を悩ませ、先輩方の研究発表を神妙に拝聴し、原先生や赤木先生のお話に、学部生の時よりもすこし襟を正して、真剣に耳を傾ける日々でしたが、ほんとうに楽しい時間でした。なにが可笑しかったのか、今も、しょっちゅう笑い転げていたことしか思い出せません。しかも、世間は狭いもので、「和田くん」が私の伯母の嫁ぎ先の親戚にあたる方である（どういう関係なのか、今もってよくわからな

いのですが)というおまけまでつきました。夏には、研究生の青井(佐藤)英子さんと一緒に、大阪外大のお仲間との祇園祭見物にもお誘いいただき、コンチキチのお囃子と、日暮れてからの京都の雅な灯が今も記憶の奥に刻まれています。もちろん、研究室恒例の和具の合宿が楽しかったことは言うまでもありません。

2年間の留学を経て、阪大の修士に復学しましたが、その時には「和田くん」はすでに立派な修論を仕上げて、優秀な研究者の道をまっすぐに歩み始めていらっしゃいました。母親業に忙しく、どんどん道を外れてゆく私には、その姿はただただ眩しいばかりでした。

住まいが横浜に変わり、原先生、赤木先生の学恩に報いることもできないまま、阪大仏文科は、私にはどんどん遠い存在となっていました。学部の後輩の杉山(田中)洋子さんから、年に一度、せっかくの予餞会の機会に「ミニ同窓会」をしましょうとお誘いのお葉書をいただいたのを機に、ここ何年か、場違いではないかと申し訳なく思いながら、研究会や予餞会に時々参加させていただいております。柏木先生、和田先生、そして山上先生のもとで研究に打ち込んでいらっしゃる、若い、滄溟とした「現在の」阪大仏文科の新鮮な空気をちょっぴり吸わせていただけるのは、春の楽しみのひとつです。

予餞会の席で、主任教授として、卒論・修論を書き終えた方おひとりおひとりを紹介してくださるのが、柏木先生のご退官後、和田さんのお役目になりましたが、論文ひとつひとつに、丁寧な、深い敬意と愛情をこめた的確なコメントをつけていかれる和田さんは、昔の面影を残しながら、かつて仰ぎ見た先生方のお姿に見事に重なって見えます。40年間、志を高く持ち続け、学者の道を究めてこられたのですね! そんな「和田くん」に、かつてのたったひとりの同級生として、心からの喝采をお送りし、これからのますますのご活躍をお祈り申し上げたいと思います。

最後に質問をひとつ。和田くん、どうすれば、そんなに歳をとらないの?

(翻訳家・慶応義塾大学講師(旧姓 今井))



岩根先生のお宅でのクリスマスパーティー

写真左上が石井先生、和田先生はそのお隣に、岩根先生はセンターに

## 和田先生のまなざし

石井 真奈

先生に初めてお目にかかったのは、今から五年ほど前のことだったと思う。研究科長として多忙を極められる中、アポイントもなく急に来訪した私を快く迎え入れてくださったのだった。立派な研究科長室の机を挟んで向かい合い、当時浮上していたカリキュラム改変案について伺った。先生の清冽なまなざしと明快な説明が印象に残っている。そしてなにより、出版社の人間とはいえ、突然やってきた小娘に対して、時間を割いて真摯に丁寧にお話してくださったことに、とても感じ入ったことを覚えている。

先生とは教科書・一般書あわせて計三冊の編集作業で一緒させていただいた。中でも記憶に残っているのが、『フランス文学小事典』の改訂である。柏木先生をはじめとする先生方が学生たちと協働し作り上げた、コンパクトながらも充実した事典で、初版から十余年、満を持して増補版刊行の運びとなった。先生には編者の取り纏めをしていただき、何から何までお世話になった。こちらの要望に綿密に耳を傾け、制約のある中で増補項目のご選定を丁寧に取り纏めて下さった。そのうえ私の間の抜けた質問にも誠実に答えてくださり、先生には本当に頭が上がらない。

改訂作業も終盤にさしかかった十月のある日、月末に開催される仏文学会にて宣伝するための「配布用抜き刷り冊子」のその抜き刷り箇所のご指定をいただいていないことに気づいた。今から作成するには来週早々にはご指示をいただかないとまずい。几帳面な先生のことなので、私が締め切り時期を間違えたに違いない、と青くなりながら、自分のメールを確認すると、九月末締切にて指定をお願いしている。恐れながら先生へご連絡を差し上げると、丁寧なお詫びとともにすぐに箇所をご選定くださった。締め切りを勘違いしたということに先生がショックを受けておられ、大変胸が痛んだ。しばらくして、編者全員へ宛てたメールにはたしかに「九月末」と書いていたのだが、その後先生と一対一でやりとりをしていたメールに、私が「十月末」と記載していたことが、先生のご指摘で明らかになった。働き始めてから今までで最も忙しいときのことで、「この九月が早く過ぎ去ってほしい……！」という私のつよい逃避願望がそのまま文面に表れてしまったらしかった。単なる私の間抜け話ではあるのだが、疑問に持たれたことを丹念に追及される姿に、先生のなにごとにもひたむきな姿勢を改めて感じたのだった。

その後すぐ行われた学会でお会いした際の「石井さんには申し訳ないけど、これですっきりしたわ」という気遣いあふれたコメントとさわやかな笑顔が忘れられない。この先の学生たちが、この温かく真摯なまなざしを受けることはないのかと思うと、残念な気持ちでいる。

(朝日出版社フランス語テキスト担当)

## 和田先生のご退職に寄せて

岩村 和泉

1997年、私がフランス文学研究室に入った年の和田先生は、確か幻想文学論について講義されていたと記憶しています。岩根先生に初級文法を教わった後、和田先生の精緻かつ堅実で、動詞の時制、冠詞一つも疎かにしない授業を通して、学問としての文学テキストの読解を学びました。大学院に進んでからの研究発表では、柏木先生が研究の着眼点や、発表の見せ方といった全体に関して評価された後に、和田先生が具体的な用語の使い方や翻訳のミスも見逃さず直してくださいました。出てきた時は必ず学生に唱えさせておられた「接続法大過去は条件法過去第二形」や、学生が根拠薄弱な発言をしたときに先生がよく仰っていた「discutable」の語は、記憶の中で学生時代の研究室の風景と深く結びつき、今でも読書中に見かけると一瞬にして過去の日々を蘇らせてくれる、私のプチット・マドレーヌです。

先生が研究室の学生をご自宅に招き、手料理を振る舞ってくださった休日の昼下がりも忘れられません。味や盛り付けの美しさだけでなく、手順ごとに台所を片付けながら調理を進める手際の良さという意味でも、先生のお料理はプロ級でした。あまりの楽しさに、皆すっかりリラックスして盛り上がったことをよく覚えていました。

しかし最良の記憶はやはり和田先生のブルーストの授業を受けられたことです。先生とともにゆっくりとたゆたうような美しいフランス語を一つ一つ読み解き解釈していった時間は私の財産です。これまで阪大仏文の学生たちが独占していたあの素晴らしい「時」が、これからは大学の外にいるフランス文学の読者にも見出され、共有されていくであろうことを思うと、今から楽しみです。これまでのご指導に感謝を申し上げるとともに、先生の益々のご活躍をお祈りいたします。

(大阪大学博士後期課程在学中)

## 和田先生の思い出

植村 実江

秋になるといつも、ボードレールの「秋の歌」が心に浮かびます。私がこの詩に出会ったのは、大学院に入って最初の和田先生の授業でした。『失われたときを求めて』の購読の授業で、和田先生がそのセメスターの導入で選ばれたのは、「ブルーストにおけるボードレールの影響」でした。それ以来、ボードレールは私の

好きな作家になりました。私にとってボードレールは、プルーストと似て、理解できない部分が多く、それによりなおさら追求したくなるような作家です。「秋の歌」も、もちろんそのときは何となくしかわからず、その後も自分で少し勉強したりもしましたが、謎は深まるばかりで、なおさら興味を掻き立てられるのです。学部が仏文専攻でない私は、フランス文学についての基礎的な部分が多々抜けているのですが、あの時ボードレールに触れる機会があったことは実に幸運だったと思います。

肝心のプルーストですが、これも和田先生の授業は貴重な経験でした。プルーストは難しいので、授業で取り組まなければ、敬遠し続けていたかもしれません。始めてみると、プルーストの複雑なテキストはパズルのようで、私はすぐにこの謎解きのファンになりました。そんなわけで、プルーストの授業がおもしろくて毎回楽しみでした。ときには、試訳の順番が回ってくるのが早くて、つねにプルーストに追い立てられているようなセメスターもあり大変でしたが、それにより「翻訳力」がつくのが実感されました。今はこのような授業を受けていないので、せっかくの力がすっかり衰えてしまいましたが。和田先生は、プルーストの専門家でありながら、ご自身の解釈を押しつけたりなさらず、いつも学生の考えに熱心に耳を傾けて下さいました。まれに、いい発見をしたとほめて下さることがあり、本当にうれしかったです。プルーストの一段落だけでも、調べ出したら一週間では足りません。だからこそ、和田先生の授業を通して、とことん納得するまで調べるといった基本的なことを教えていただいたように思います。

フランス文学研究室は私にとって未知の世界で、最初はとても不安でした。しかし、和田先生、山上先生との初めての面談の時、フランス文学を勉強したいという志を暖かく受け入れていただけたことが、今でも印象に残っています。もし、研究室が閉鎖的だったらもっとハードルが高かったと思いますが、そうではなかったのは、やはり先生方のお人柄が、研究室の雰囲気反映しているからだと思われます。

博士後期課程も三年目になり、曲がりなりにもここまで続けて来ることができたのは、和田先生のお影です。これからも和田先生に教えていただいたことを忘れずに、フランス文学に取り組んでいきたいと思っています。

(大阪大学大学院博士後期課程在学中)

## 尊敬と感謝の念をこめて

太田 晋介

いつかの文学部発行の専修紹介の冊子に各教員がそれぞれの座右の銘を答える欄があったのだが、和田先生がそこに「忙中に閑あり（ヴァカンス精神）」と書か

れていたことが記憶に残っている。一回生がこの言葉を読んだならば、仕事よりも休みを重視するステレオタイプなフランス人気質を読み取るかもしれないが、私の印象は逆である。というのも、自分が学部生としてフランス文学研究室の扉をたたき、入学して以来、和田先生がどれだけ忙しい日々を送り、激務をこなされ続けてきたのかを人より少しだけ近くで見ることができたからだ。自身の研究と並行しての日々の授業、推薦状の執筆などの学務、講演会や学会の司会・運営、さらには2年の文学研究科長としての役職など挙げればきりが無い。和田先生が実際にどれだけお忙しかったのかは想像もつかないのだが、少なくとも先生がその全てに誠実に取り組まれてきたことは下にいる身であっても拝察するところである。だからこの言葉の中に自分は、普通の人ならば「忙中に閑ありだって！冗談！どこを探しても暇が見つからないから忙しいって言ってるんだ！」などと当たり前の事実を口にして終わるだろう状況の中で、それでも研究者が持たなければならない余暇 *schore*（本は読まなくてはならない）を鋼の意志で積み上げ続けてきた人の凄みのようなものを感じる。

このようなことは少なくとも、習慣のレベルで自己をきちんと律して初めて可能になるのだと思う。誰もが知るように、先生は学生よりも早く大学に来て、煙草を吸わずかなポーズを除けば、定刻までずっとお部屋の明かりはついたままである。昼は学務、授業の準備、自身の研究に全力で取り組み、夜は意識的に *vacance* の語源に立ち返るかのように「何もしないこと」をする。言葉にすると簡単に見えるが実践が極端に難しいこの行為を和田先生は長い間続けられてきたのだと考えている。

こう書いたが、これは私の解釈が多分に混じっている。というのも和田先生ご自身は自らの忙しさを表に出すことは極力なさらないからだ。用事があり先生のお部屋にお邪魔すると、頭では先生はお忙しいのだとはわかっていても悠然と振る舞われるご本人を目の当たりにするとそのような印象はいつしか消え去ってしまう。和田先生が必要な事にあっては時間を惜しまず、愛想よく丁寧に應對してくれることは十年以上前から変わらない。余暇を創るための苦労を惜しまないがそのことで周囲に過度に気遣わせないこと、それが和田先生が自己に課したことなのではないかと自分は思っている。

いずれにしろ「今・この時」を大事にされる和田先生は本当にかっこいい（とりわけ話されるフランス語が）。京都の呉服屋の次男として生まれたと聞くと、先生の言葉に京都人らしさを私はあまり感じない。たいていの場合、和田先生は相手を傷つけぬよう言葉は折ぶが、必要なことはごまかさずその場ではっきり言う。かつて博士課程に進学しようかどうか迷っている私に対して「将来の保証は一切できませんよ、それでも良いのなら…」と本当のことを伝え、あるいは留学中、研究の時間を割いてでも FLE 教授法の資格を取るべきか迷っていたとき「良い論文を書くこと、それが一番です」というアドバイスをくれた和田先生には心から感謝している。和田先生の仕事ぶりを思うと、先生のご厚意から助教職に就かせていただいたにも関わらず、その任期中に博士論文を書き上げることができなかつ

た自分の怠惰さには忸怩たる思いである。少しでも良い論文をなるべく早く書くことで恩返ししたい。それまではご退職された先生が今より少しだけゆっくりと、大河小説の頁をめくりながらあるいはお気に入りのクラシックの名盤を聞きながら待つて下さることを祈っている。

(大阪大学任期制助教)

## 緻密で周到的な秀才

柏木 隆雄

本来、退職される方の記念誌に、その人よりも年長の者は文章を寄せぬのが礼儀だが、春木仁孝、金崎春幸、北村卓の三氏、そして今回の岩根久、和田章男両氏とは、言わばガリアの同志のような人たちで、非礼を承知で是非にも書いておきたい。和田さんと初めて会ったのは、私がガリアの研究会で『ウジェニー・グランド』における光について話した時、留学前の修士課程の学生として聞き、挨拶もした、というのだが、さっぱり記憶がない。私は彼が4年のフランス留学から帰り、研究室に帰国の挨拶に来られた時が最初だとばかりずっと思っていた。仏文の助教授として私が着任したのは1983年。ちょうど入れ替わりにパリに行っていた噂の秀才が、その3年後の今、眉目秀麗絵に描いたような青年学徒、というより若々しい学生そのままで、言語文化部に転出した北村卓助手の後任として4月から着任する打ち合わせに現れて、留學生活、博士論文の成果などを赤木先生に明るく報告するのを傍で聞いた印象が強すぎたからだろう。

ほとんど見知らぬ、馴染みのない男が助教授でいて、新任助手としていろいろやりにくかったに違いない。それに私は当時の英文の藤井治彦教授や玉井璋助教授、新野緑助手とお喋りすることが多く、学生さんのことはすっかり和田さんに任せ放し。加藤靖恵さんや関本善和君たちはすっかり彼になつて、独身の彼を囲んでほとんど毎日夜遅くまでお喋りが続き、卒業の際、その思い出を大切に、恒例の謝恩会も他に席を設けず、研究室で彼ら自身が用意したご馳走とお酒でのもてなしで大いに盛り上がった。

助手在任最短の1年で言語文化部に転出した和田さんをフランス文学専攻の助教授として迎えてから15年、実に長いあいだ厄介のかけっ放しだった。私はずばらで、声高なお喋りの上、うっかりミスが多い。いつも横でハラハラして見られているのがよく分かった。思いつくとすぐ走り出して、あまり相談もせず企画を立てる。えー!?!と思いつつも付き合ってたのが、ルナール全集(臨川書店)の翻訳やフランス文学史(大阪大学出版会)、フランス語初級教科書、フランス文学小事典(朝日出版社)などで、しかも和田さんが助教授着任早々、私は在外研究でさっさとパリに出かけ、折から刊行が始まりだしたルナール全集の翻

訳稿について、パリからやたらと五月蝍い注文をファックスで送りつける有り様だった。初級教科書を編纂する時は、言語文化部の諸先生ときちっと打ち合わせをして、月最低一回、ほぼ3年間の議論の応酬をうまくまとめて下さった。私はその後の会食で本領を発揮するのみで、皆も呆れ果てたことだろう。

2004年11月ストラスブル・マルク・ブロック大学で行われた大阪大学フォーラム。和田さんはコーディネーターとして会議をまとめ、その上、留学している仏文の学生たちと、宮原総長はじめ同行の大学執行部を含めたお世話も引き受けて下さった。今でも宮原先生は、柏木さんの大阪弁のフランス語と違って、和田先生のフランス語はほんとにお上手だった、とお会いする度におっしゃる。

つい先日和田さんが主宰するブルストと音楽を巡るシンポジウムでその発表を聴いたが、さすがにわかりやすく、堂々として、ますます磨きがかかっている。鈴木道彦氏がブルストの自筆原稿を判読には、「(1)ブルストの作品に関する深い理解と知識(2)書体への慣れ(3)とくに外国人の場合は語学力、が要る。」と生成研究の至難を説いているが、その先達の吉川一義氏や故吉田城氏などの薫陶を受けて、今や斯界をリードする大家の一人となった姿を目の当たりにして、まことに感慨深かった。

研究の最盛期に文学研究科長に推された和田さんにはお気の毒だったが、私が現役の頃と違って舵取りの難しい案件を、緻密で、思慮深く処理して教授会の深い信頼を得たことは、他の学部長経験者たちも称賛するところで、私はあらためて和田さんの事務能力の高さ、てきぱきとした対応を思い返しながらかんがへばかり。

こうして個人的な思い出を書き出したら切りがない。せめて和田さんの今は亡きご両親について付け加えたい。私が助教授に赴任して2年目くらい、留学中の彼に代わって休学届を出しにお母様が研究室にお出でになった。まことに楚々として上品な方で、いかにも息子さんを心配されている、という感じが、その明眸にも控えめな言葉にも表れて忘れ難い。お父様のご葬儀の際のビルマ歴戦の京都の連隊の人たちが振った永訣の大きな連隊旗。死地を共にくぐり抜けてこられた戦友の繋がりを大事に、大冊2部の従軍記録を書いておられるのを和田さんから借りて熟読した。無謀極まるインパール作戦については、多くの本が出ているが、父上のはそれらに遙かに卓れる詳細な戦闘記録、従軍記録で、和田さんのブルストにおける綿密な調査力とそれを的確に写す文章力は、あるいは父上ゆずりか、と想ったりした。

(大阪大学名誉教授、大手前大学名誉教授・客員教授)

## BN, ITEM と阪大で

加藤 靖恵

3年生の4月、フランス文学研究室のオリエンテーションに行ったら、知らない人が助手室にいた、それが和田先生でした。

大学に入学して、フランス語を勉強して大学院には行きたい、一度でいいから、文学談義でフランス人に「なるほど」と言わせたい、と夢を抱いていた私は、1年生の初夏に美容院で開いた雑誌で「おしゃれなフランス映画」と紹介されていた『スワンの恋』に衝撃を受け、ボルノ小説だと信じて手にとった『失われた時を求めて』をいつの間にか真面目に読むようになりました。卒論はブルーストかな、と思って進学した矢先、「コンプレ」のタイプ原稿と草稿についての画期的な発見をもとに、ソルボンヌで博士号を取られたばかりの和田先生が現れたのです。まさに究極の理想モデルといきなり鉢合わせすることになったのです。

当時4年生だった中尾さん（旧姓）の卒論のために『囚われの女』の読書会を先生が開いてくださったので、同級生の吉川くんと大喜びで参加しました。（その読書会の中尾さんの卒業とともに当然のように消滅し、私と吉川くんは後々随分ひがんだものです。）3年生の2月、一ヶ月のパリ滞在ツアー出発前に、学生研究室のブルーストの書架の前で、フランスで買うべき研究書を先生より口頭で教えていただきました。学生に対してあれほどの的確な指示を私はいつになったらできるようになるのでしょうか。その時のメモを今でも持っています。今は懐かしいBardèche、後の指導教授の Jean Milly 先生、中でもあそこで Jean-Pierre Richard の名前が挙がったことが、私の人生を決定づけてしまいました。

大学院入試が近づくにつれ、赤木先生から「ブルシエ」「テーズ」の2語をよく伺うようになりました。和田先生の勧めで受けたロータリー財団の奨学生としてアンジェ大学で一年を過ごし、パリから日本に戻る前日、夕暮れのソルボンヌ大学の前で、続いてリシュリユー通りのBNの入り口で、今度は先生のように「ブルシエ」としてここにきて「テーズ」を書きます、と心の中で誓ったのを覚えています。しかし、その「ブルシエ」には2回も落ち、選んだ大学はパリ3、草稿研究もどきを論文のテーマに選んだものの、先生と同じBNではなく、諸事情でエコール・ノルマルの屋根裏部屋のITEMに籠る日々が始まったのでした。「ズレ」は広がる一方で、5年かけてやっと書いた「テーズ」に対して、和田先生は「僕たちの生成研究とは違う」、阪大の大学院の先輩や後輩には「同じ作家でもこんなにアプローチが違うものなのですね」と面白がられる始末でした。

留学中、「étudiante d'Akio Wada」の一言は、パリの近寄りがたい先生方の表情を柔らくし、「開けゴマ」と、どんなドアも開けて新しい資料に出会わせてくれる魔法の言葉でした。行き詰まればかりの研究からいまだに抜けられないのは、

あのワクワクする気持ちが忘れられないからかもしれません。

(名古屋大学准教授)

## 和田先生の印象

川上 紘史

和田先生がご退官なされる。これは僕が2012年に修士課程に入った時からはっきりと示されていた事実だった。というのも、プルーストの講義の初回で、和田先生ご自身が、退官するまでに『失われた時を求めて』の全巻を購読するつもりだとおっしゃっていたからだ。その年には『スワン家のほうへ』第二部「スワンの恋」の、スワンがオデットを探し回って、ようやく見つけた彼女と馬車に乗り、「カトレアをする」に至る箇所を読んでいた。だから、僕が真面目な学生であったならば、幸いなことに、『失われた時を求めて』のほぼ全体を第一人者のもとで読むという得難い経験ができていたことになる。実際には、文学音痴の僕は『ゲルマントのほう』の講読には参加しなかったし、留学を始めたので『囚われの女』以降の講義には出たくても出られなかったのだが。

そういうわけで、和田先生がご退官なされることは多くの学生が意識していた。けれどもそれに現実味は伴っていなかったように思う。「いつの日か太陽が消滅する、そうなったらみんな大変だね」というような、事実だがそれについてどうこう考えるのは気晴らしでしかないことのように僕は認識していた。

そして現実には和田先生という太陽が研究室で見られなくなる日が間近に迫った今でもなお、現実のことと思えていない。それだけ先生の実在は研究室にはなくてはならないものであった。学生としては、講義、講読を通じて、テキストの丁寧な読み、テキストを支える文化的背景への広く深い目配りの必要性、そして何よりテキスト解釈を楽しむことを、和田先生ご自身のあり方を通じて示していただいたように感じている。また、コース・アシスタントとして研究室の運営に関わらせていただいた身としては言えば、和田先生は本当にお優しい方だった。未熟な私は何をやるにも先生お伺いをたてていたが、いつも嫌な顔一つせず、適切な指示を与えてくれた。留学準備などであまりに忙しかった時に、GALLIA編集の一部を引き受けると申し出てくださったのは本当に嬉しかった。

学生にも、コース・アシスタントにも、あたたかくなすべき方向を示してくださった和田先生はまさに研究室の太陽であった。これから少しお目にかかれる機会は減ることだろう。けれども、GALLIAの会や学会の場では変わらずお目にかかれるはずだ。その時に、またあたたかく導いていただけることを心から願っている。

(大阪大学博士後期課程在学中)

## 和田先生、ありがとうございます

黒川 彩子

和田先生にはとてもとてもお世話になりました。修士課程の時も、博士課程の時も、留学のときも。右も左もわからぬまま研究室の扉を叩いたあの日、その時から様々な機会と形で学問面だけでなく研究の「いろは」をご教示いただきました。

とりわけ印象的に覚えておりますのが、修士課程に入ってから始まった『フランス文学小事典』の制作です。先生方があげてくださったフランス文学に関わる作家・事項を学生がそれぞれ書き、その後皆で話し合いながら項目を仕上げていくものでしたが、作業の細かさにとっても驚きました。アステリスクの位置や算数字と漢数字の統一などといった規則的なことはもちろんのことながら、例えば詩「へん」とした場合、「編」と「篇」のどちらが適切であるかといったことを漢字の語原にまでさかのぼって決めていくのです。どちらも辞書に載っているから良いではなく、今自分のしたい表現においてどちらがより適切であるかをつきつめて考える。作品を読む上でも、論文を書く上でもとても大事なことをこの作業で学ばせていただきました。またこの時、先生と先輩方の中で交わされるするどいやり取りの中、何とか発言しようと思えよう見かねて発する私の言葉を、決して切り捨てることなく先生は聞いてくださいました。どんな言葉でも一度必ず受け取ってくださったそのおかげで、その後も必要となる発言する勇気をもらえたと思っております。

先生はいつも挑戦させてくださいました。考える時間を下さり、自ら気付くきっかけをくださいました。修士、博士課程を通してずっとご教授いただいた先生がご退官されるのはとても寂しく、不安な気持ちさえますが、先生に教えていただいた一つ一つを大切に、牛歩の進展ですが研究とつきあっていきたいと思っています。

(福井製菓専門学校非常勤講師)

## 和田先生への感謝

小林 愛斗

和田先生にはブルーストの講読の授業で1年半大変お世話になりました。特に最初の1年は受講者が私を含めて2人しかおらず、隔週で訳を担当したことは今でも鮮明に覚えています。受講する前から『失われた時を求めて』は少しだけ読

んでおり、またその難しさをわかっているつもりでしたが、実際に授業を通して精読してみると、文の構造を理解するのに2時間、全体の内容を掴むのに3時間、使われている語彙の意味を理解するのに2時間と予習だけで7時間以上費やすほど難しいことを痛感しました。途中何度か心が折れそうになることもありましたが、先生のご指摘や解説を聞いていくうちにブルーストの文章の奥深さを体感し、気がつけば金曜4限の毎週の授業が楽しみになっていました。ちょうど私が受講した時は音楽を扱っていたこともあり、今では音楽を聴くことが日課になっています。授業のおかげでフランス語を読むことの大切さを再認識できたことはもちろん、私の日々の生活がより充実したものに変わりました。和田先生のブルーストの授業を受講できたことの恩恵は計り知れません。和田先生、本当にありがとうございました。

(大阪大学博士前期課程2年)

## ご退職に寄せて

酒井 栞

和田先生、この度はご退職おめでとうございます。これまで専修の授業はもちろん、研究室の行事などでも大変お世話になりました。

初めて先生の授業を受けたのは、一年生のときの文学部共通概説でした。パリ大改造についての講義は、『レ・ミゼラブル』でフランス文学に興味を持った私には大変面白く、フランス文学研究室に入ろうと考えたきっかけでもあります。

研究室に入ってから、講読の授業が特に印象に残っています。最初のうちは、本格的な講読ということで不安を持っていましたが、先生は読み方・文法事項な



ど、基本的なことから非常に丁寧に教えてくださり、とても勉強になりました。先生が授業で選ばれる作品はどれも魅力的で、授業のたびに新たな発見がありました。

また、今年の夏合宿に合宿係として参加したことも思い出されます。準備に手間取り迷惑をおかけしましたが、多くの方に参加して頂くことができ、よい思い出作りができたと思います。合宿後、先生から「楽しかった」とメールを頂いたときは大変嬉しかったです。

フランスへ短期留学に行くため、先生には推薦文も書いて頂きました。急なお願いだったにもかかわらず快く引き受けてくださり、ありがとうございました。現地でフランス語を学ぶ、文化に触れるという体験はとても貴重で、有意義な留学となりました。今の私があるのは先生のお蔭であると思います。

二年間という短い間でしたが、先生からは多くのことを学び、楽しい時間を過ごせたように思います。今まで本当にありがとうございました。ご退職後もどうぞお元気にお過ごしください。

(大阪大学学部3回)

## ゝ奇蹟的、だった時代——和田先生のご講義を振り返って——

坂巻 康司

私が大阪大学大学院仏文研究室に所属していた期間はあまりにも短く、また、関西を離れて既に12年も過ぎてしまったため、徐々に多くの出来事の記憶が薄れつつある。しかし、それでもあの時代はゝ奇蹟的、なほど幸福な時期だったと、いまとなっては思い起こすことが多い。

あの頃、誰もが知るように、和田章男先生と柏木隆雄先生は他に類を見ない名コンビ振りを発揮しておられた。一般的には「豪快な柏木先生に常に寄り添う、繊細な和田先生」というイメージの方が強いかも知れない。だが、私の知る限り、お二人は絶妙なバランスを保ちつつ、対照的な役割を演じておられたような気がする。その対照性は、とりわけ授業において際立っていたように感じられる。

例えば、柏木先生は、学部・大学院共通のバルザック講義において、時に涙を目に浮かべて授業をされることもあった。とある短篇小说を扱った際、物語をご自身の思い出と重ね合わせ、嗚咽を押さえるように解説された時の荘厳な光景はいまだに忘れられない。その時間は、「人生」と「文学」を等価のものとして扱う柏木先生ならではのものであり、まさにゝ独壇場、であるかのように感じられた。

それに対して、和田先生の大学院講義は常に笑いに満ち溢れていたように思う。私が受講させていただいた年度は「文学作品における自然描写」がテーマだった。和田先生は、学生がそれぞれの持ち味を活かした発表をするのに対し、常に的確

なコメントで応じておられた。学生の繰り出す様々な解釈に対し、時に目を丸くされて驚きになり、新しい（と思しき）発見に狂喜されることもあれば、あるいはその逆に厳しい意見を提示されることもあった。いずれにしても、そこには、「まず、自分自身が文学作品を本気で楽しむ」という姿勢——それこそが阪大仏文の伝統なのだ——が貫かれていたように思う。と同時に、学生の冒険心・挑戦心・競争心に火を点けるような導き方を和田先生は徹底されていた。こういうことをさりげなくやってしまえるのが和田先生の類まれな才能なのだろう。そして、この授業の祝祭的な雰囲気こそが、あの『フランス文学小事典』の編纂のお仕事へと結実していったことは間違いない。多くの院生を統率し、あれほどの煩瑣な作業を粘り強く、しかし陽気に続けられたお姿にこそ、和田先生の真骨頂があるように感じられる。短い期間ながら、そのような現場に居合わせることができた幸は、やはり「奇蹟的。なものだった」としか言いようがない。

この度、和田先生は大阪大学の専任の職からは退かれるとのことだが、ブルースト研究の世界ではまだまだ現役ど真ん中のお仕事を続けていかれるのだろう。そのお姿を遠くから仰ぎつつ、とうてい敵わないと思いながらも、これから多くのことを学ばせていただければ私は思っている。

（東北大学教授）

## 紅茶のカップから溢れる思い出

阪村 圭英子

いよいよ和田章男教授が定年退職されるときが来てしまった。もちろん2019年度で阪大を去られることは重々承知していたが、いざその時となると切なくて虚無感に捉われている。私が1997年に阪大大学院を受験したのは和田先生がいらしたからだ。大阪外大卒業後の進学先を決める際にブルーストを対象とするならば阪大に優れた研究者がいらっしゃるかと勧められたのであった。入学以来22年も時間が流れ、私にとっては常に阪大＝和田先生であった。社会人で同い年という教員の立場からは扱いにくい者が研究について何も知らずに研究室に入ったので、和田先生には多くのご迷惑をおかけしたと自省している。先生はそのような私にもいつも丁寧によく多くのことを教えてくださった。こうして阪大仏文研究室で先生方のお導きで貴重な大学院生時代を過ごすことができたのは誠に恵まれていた。

今年の9月28、29日には阪大主催で国際シンポジウム「ブルーストと受容の美学」が開催された。フランスからの2名の研究者ならびに多くの日本人研究者たちのフランス語による発表を約40名の参加者で拝聴することができた。主催者の和田先生は準備に忙殺されていたはずだが、ご発表は精緻なりサーチに基づいた大変興味深い内容であった。さすがに一流の学者はどこまでも完璧と驚嘆し

た。同時にはるか昔日の出来事が無意識的記憶のように蘇ってきた。院生になってすぐに阪大で開催されたシンポジウムである。1998年仏文学会全国大会の日本ブルースト研究会であった。全国から精鋭のブルースト研究者達が一堂に集まり発表・討論される様子に感動した。和田先生が最後の発表者であった。その内容は今も覚えている。そのときに阪大とはこのレベルで研究できる場なのだと強く刺激を受けたのであった。

「失われた時」を語りだすと紙幅がつきてしまう。そこでひとつだけ和田先生とのとおきの逸話をご紹介したい。私がまだ院生時代の和田研究室での「或る夜の出来事」だ。それは初冬の月曜日の院生達の発表終了後であった。先生のデスク横の窓の外はもうすっかり暗くなっていた。私と先生はデスクの側でなにかブルースト研究会のことで立ち話をしていたと思う。突然、先生が押し黙って研究室の天井の隅を凝視された。私も何気なくその視線を追って部屋の入口上の天井の方を見上げた。恐怖で総毛立った。男の生首が空中に浮かび、大きな両目を剥いて私たちをじっと見下ろしているではないか。震え上がった私は悲鳴をあげて、先生の背後に逃げこんだ。同時にその首は掻き消えた。そこで気を取り直して考えると、研究室の出入り口扉側の天井のすぐ下には明り取りの窓が連なっている。その高い位置の窓から作業用梯子にでも上っていた作業員がたまたま室内をのぞき込んでいたのであろうと推測できた。でも私は取り乱したけれど、その間和田先生はまったく動じずに泰然自若でいらした。先生の後ろに隠れながら本当に感服した。日頃から私は冷静沉着と友人達から指摘され、そう自負もしていた。それがすっかり怯えうろたえた。数分後には、びっくりしましたねと先生と笑いあったが、私は先生の肝の据わったお姿に心打たれた。別の側面からも着実に研究を進められる底力を察知させていただいたのである。

思い出はつきることなく紅茶のカップから溢れ出てくるが、マドレーヌはもう無理やりにでも口に押し込んでしまおう。これからも一生涯、ブルーストのページをめくる度に、拙い社会人院生にも研究の喜びを分け与えてくださった恩師和田章男教授に、私は尊敬と感謝の熱い想いを捧げご多幸をお祈りするのである。

(奈良教育大学非常勤講師)

## 和田先生から繋がる読書

菅野 梨夏

私が最初に受けた和田先生の授業は、1年生の時の文学部共通概説の授業でした。さすがフランス文学研究者、ムッシューという感じの雰囲気だなあと感じました。その後研究室訪問の際、関西弁で熱烈に我々1年生を勧誘される姿を見て、ギャップに驚いたのを覚えています。仏文研究室に入ってから、講読の担当に

なるたびにドキドキする日々でした。もちろんどの授業でも緊張するのですが、和田先生の授業では特に戦々恐々としながら授業に挑んできました。しっかり予習しているつもりでも、次々に飛んでくる文法事項や意味内容に関する質問に答えられず、訳の曖昧さがあらわになってしまうからです。とりわけ金曜4限のブルーストの講読は、日本語として意味の通る文に訳すのも難しく、悪戦苦闘していました。しかし、日本語訳からさらに一步進んで内容に踏み込んだ議論をするのは、それまでのように1人で本を読んでいた時とは違う積極的な読書の体験で、とても刺激的でした。そして授業外では、研究室内のパーティーや新入生歓迎コンパなどで場の中心となり、乾杯の音頭を取ってみんなを盛り上げてくださる姿も印象的でした。ある作品の中で別の作品に出会うというのは味わい深い経験です。ブルーストの作品は、まさにそうした出会いの繰り返しだと思います。和田先生を通じてブルーストの思想にほんの少しでも触れることができたのは、とても貴重な経験です。2年間という短い間ではありましたが、和田先生から教わり、学んだことを糧に、この先の勉強・研究に取り組みたいです。今まで本当にありがとうございました。ご退官後も、何かの機会にお会いできるのを楽しみにしております。

(大阪大学学部3 回生)

## 記憶の一年 ～ 和田先生、助手時代 ～

関本 善和 (昭和 63 年卒業)

「今度フランスから来る後任の先生は、エリートでイケメンの先生だから。」

助手の北村先生は研究室見学の私たちに言った。女子学生はイケメン先生の謂う「イケメン」に心躍らせ、男子学生は「エリート」に反応、恐れ慄いた。

——— 研究室、日本語禁止になるんじゃないだろうか？

\*

\*

\*

後に昭和最後の卒業生となる私たちは、教養課程2年を終え、専門課程に仏文(仏語)学を選んだ。期待に不安を抱えていた3回生を暖かく出迎えて下さったのが、新任助手の和田先生だった。自然と、講義や演習の合間に研究室に集まる。院生や学部の先輩とともに、文学やら音楽やら俗っぽいことも含め語り合う場がそこに合った。時折、赤木先生や柏木先生、ディソン先生も顔を出されると、一気に文化の香りが立ち上がった。それと珈琲と紅茶と洋書の匂い。この薫りは学問のとは口に立つ自分と結び付くこととなった。

研究室を中心に仏文の輪が広がっていき、その随伴音楽の指揮者が先生だった。

尤も3回生には三文オペラでしかないが。個人的には、近くて遠い言語文化部の岩根先生を和具で知る機会を得、飲みの席で小林先生と話すことができたのも先生のお蔭。適当に選んだ大学の教養課程での私の後悔は打ち消され、救われた。ここから自分の真の大学生活が始まるのだと。この奇跡のような一年を今でも私は感謝している。

..... この幸せな記憶により、20年後私は阪大に戻ることになるが、それはまた別のお話。

(関西テレビ放送勤務)

## 和田章男先生に教わったこと

高岡 尚子

和田先生に初めてお目にかかったのは、私が学部で4回生のときで、先生はその年、仏文研究室の助手に就任されたのであった。その時代にはまだ、専門に分かれるのは3回生のときで、最初の年に助手だった北村先生から、新しい助手の方に交代されるのは、とても不安であったし、しかし、同時にとても楽しみであった。フランスに長いこと留学されていて、戻ってこれたばかりの先生だと聞いていて、すごく遠くのものを見るような気持ちでいたのを、よく覚えている。

そして、和田先生は、想像していたとおり(?)、とても遠くからやってこれたような、すごく輪郭のはっきりした話し方をされる方だった。にこやかでいて、言われることにはびーんと筋が通っていて、柔和な話しぶりながら、声の隅々にまで力がみなぎっているようだった。わずか1年で、文学部の助手から言語文化部に移られ、私たちの学年は卒業を迎えた。

5年の一般企業勤めの後、大学院に進学したのだが、2年目に、和田先生が助教授として文学部に戻ってこられた。本当に懐かしく、今でも授業のことをはっきりと覚えている。ブルーストの授業は、とりわけエネルギーと好奇心に満ち満ちており、専門の研究者の講義を聞くのが、これほど刺激的なものだったかと、身震いのようなものを経験した。授業のひとつで *Contre Sainte-Beuve* を扱ったときのことを、今でも断片的に思い出して、ああ、今度あの部分を授業で使ってみよう、と考えたりする。

先生に何よりもお世話になったと感じているのは、大学院に入った当時、授業についていくには学習のブランクがありすぎて、何より、テキストにどう対峙すれば研究になるのかがわからず、途方に暮れていた時のことだ。修士論文のテーマと取り組み方法について相談にうかがった折、ていねいに声をかけてくださったことに、今でも深く感謝している。あの時がなかったら、心を整えて勉学に向

き合うことを理解できずに、挫折していたかもしれません。ありがとうございました。

その後も、学会、支部会、研究会等で、いつも変わらず輪郭のはっきりした話しぶりを、近くで聞いて勉強させていただいてきた。今年、初めてブルーストを研究する大学院生に恵まれて、これからなお一層、和田先生のご指導を仰ぐ機会も増えることと、とても頼りにしております。これからも、よろしくお願いいたします。

(奈良女子大学教授)

## 和田先生への感謝

竹田 華奈

和田先生ご退官おめでとうございます。6年間大変お世話になりました。和田先生の講義で特に印象に残っているのは講読の授業です。文章を精緻に読み込み、作者が言わんとすることは何なのか徹底的に考察していく講義内容に、初めは圧倒され、ついていくのに必死でした。しかし、講義に参加することで、次第にフランス語の文章を読み解き、分析する力をつけていくことができたように思います。そして、この力を今後社会に出てからもその分野に関わらず活かしていきたいと考えています。和田先生のご指導の下で勉強できたこと感謝しております。ありがとうございました。

(大阪大学学部4回)

## 和田先生との思い出

堤崎 暁

「和田先生がもうすぐご退職される」という話は、これまで様々な方々と幾度となく交わしてきた。しかし、仏文研究室で先生の還暦のお祝いをしたことですらい最近のことのように思われるのに、和田先生が仏文からいなくなるなどという事実は未だに実感が湧かない。このエッセイを書きながら脳裏に思い浮かべるのも、夏休みの合宿で、真っ先に海に飛び込んで浚刺と泳いだり、真夜中を過ぎても学生以上に「大富豪」を楽しむ先生の若々しいお姿ばかりである（もっとも、先生は「大富豪」があまりお強くはなく、頻繁に学生に座布団を明け渡していたと私は記憶している）。また、毎年の正月明けに、ご自宅にお招き頂いて、豪華な

料理やお酒を振る舞っていただいたことも印象深い。放っておけば昼から酒を煽って何も食べずに一日を終えたりもする、私のような寂しい一人暮らしの男子学生にしてみれば、貴重な栄養補給の場というだけでなく（もちろん、お酒もしこたまいただいていたが）、何よりも団欒して食事ができる楽しい場であり、そのような場を作っていたいただいたことには感謝が尽きない。

もちろん、学業の方でも先生には大変お世話になった。私が学部二回生の頃の授業中、先生の口から「条件法過去第二形」という言葉が発せられた。不勉強な私は、その時は「この先生は何の呪文を唱えているのだろう」などと心の中で世迷言を並べていたが、その後に教科書を確認してみるとしっかりと説明が記載されていた。それ以降、和田先生が常々仰っている通り、初級文法を疎かにしないという大前提の元、フランス語に接している。また、先生はブルーストの『失われた時を求めて』の講読の授業を長年開講なされていたが、不真面目な私は履修しておらず、先生ご本人から「堤崎くん、ブルーストの授業出ない？」と打診されても、（今思うと大変不義理なことをしたと猛省しているが）柳のように辞退し続けていた。そんな私も、2019年度になって初めて当該の授業に参加させていただいたのだが、先生は文句一つ言わずに私を歓迎してくださった。そして、先生の授業を通して、単に邦訳されたテキストを読むだけでなく、文学作品の原文を精緻に読解していくことで見えてくる面白さがあると知ることができた。和田先生から教えていただいたことは全て、これから研究者や教育者を目指していく私にとって、かけがえのない財産となっている。

（大阪大学博士後期課程在学中）



## L'élégance de Monsieur Wada

Agnès Disson

Lorsque je pense à Monsieur Wada, le premier mot qui me vient à l'esprit

est celui d'élégance. Une élégance discrète et raffinée, un peu comme Proust d'ailleurs, doublée d'une très belle voix. On sait que Proust avait un piano dans sa chambre, sur lequel a beaucoup joué Reynaldo Hahn, mais j'ignore si Proust chantait ; j'en doute, vu ses terribles crises d'asthme. Par contre la cigarette est tout à fait indiquée pour chanter Bach, m'avait appris Monsieur Wada, à ma grande surprise. Je crois savoir que Monsieur Wada chante aussi des chansons plus légères, genre crooner américain peut-être ? Mais je n'ai hélas jamais eu l'occasion de l'entendre, ce que je regrette beaucoup.

J'ai connu Monsieur Wada étudiant, assistant, professeur, directeur du département de littérature française puis doyen (ce qui prouve seulement que j'ai désormais un âge avancé). Toujours aussi sérieux, brillant, discret, et ... élégant, dans chacune de ses fonctions successives. Mais curieusement lui est resté toujours aussi jeune. Je me souviens de mon amie Anne Portugal, poète invitée à Osaka, me disant à son arrivée : « Le jeune assistant spécialiste de Proust est très sympathique – et son français est magnifique... ! ». Après quelques minutes de perplexité, je lui ai répondu que notre assistant cette année-là n'étant pas proustien, il s'agissait sans doute de Monsieur Wada, le directeur de la Section. Elle a mis un long moment à me croire.

J'ajoute qu'en effet, le français de Monsieur Wada a toujours été superbe, et ceci dès ses débuts ; fluide, aisé, et bien plus limpide à la lecture que les longues phrases proustiennes. Je ne connaissais pas grand-chose à la critique génétique avant de rencontrer Monsieur Wada, et j'ai beaucoup appris en découvrant ses articles. J'étais très impressionnée par ce travail ardu et difficile, et par l'énorme machine dans son bureau qui lui servait à décrypter les microfilms des manuscrits - placée juste en face de son écran d'ordinateur sur lequel apparaissaient gaiement ses trois jolis caniches (deux petits et un grand).

Monsieur Wada s'est toujours montré avec moi ouvert, aimable et chaque



fois très accueillant envers les poètes et écrivains français que je lui proposais d'inviter à l'Université, alors qu'ils correspondaient rarement à son domaine de travail et peut-être pas toujours à ses goûts personnels. Je lui suis très reconnaissante de sa générosité, et je lui souhaite une retraite musicale et voyageuse (à Paris entre autres, j'espère), ainsi qu'un repos bien mérité.

(Ancien Professeur invité à l'Université d'Osaka)

## 和田「さん」が和田「先生」になった年

中村 啓佑

若い頃の和田さんをほとんど存知しなかったし、お話をしたことも、非常に少なかった。ご縁が出来たのは、やはり、仏文科に席を置かれてから、そして、特に主任教授となられてからのことである。

私はパーティ大好き人間なので、予餞会・同窓会にはできるだけ出ることになっている。その都度、年配でおしゃべりの私にずいぶん気を遣ってくださった。乾杯の音頭をとる役目をくださったことも、挨拶の機会を与えてくださったことも少なくない。依頼されるとき、いつも気配りとやさしさを感じた。

そうしたお人柄もさることながら、主任教授となられてからは、研究室の運営に並々ならぬ尽力をされ、立派にその任務を果たしてこられた。フランス語・フランス文学に対する関心が、私たちの時代に比べてはるかに小さくなっている昨今の研究室運営は、さぞ大変だったろうと拝察するから、余計にその手腕は評価されるべきであろう。卒業生の一人として「長い間、ほんとうにご苦労さまでした」と申し上げたい。

お教えしたことはないが、2010年以來、学恩は受けている。それは『フランス表象文化史 美のモニュメント』を世に問われた年からである。この本を手にしたとき、「ああ、なぜもっと早くにこの本が出なかったのか!」と悔しがった。というのも、2000年ごろから、勤務先の大学でフランス文化に関する授業をいくつも担当してきたので、このような、歴史に目をやりながら、美術・文学通底の大きな流れを辿り、しかも背後の思想をも語る本が、ずっと欲しかったからである。

2011年春に退職したので大学では利用できなかったが、その後、自分が主宰した会でフランス文化を語るとき、また、CAFというフランス文明講座で話す機会を与えられたときなどは、いつもこの本に助けられた。その意味で和田さんは私の先生である。

和田さん、いや、和田先生、お元気で、今後もますますご活躍ください。

(追手門学院大学名誉教授)

## Homme de lettres au champ d'harmonie

深川 聡子

和やかな聲ひびく田の文人の——

和田章男先生に初めてお目にかかったのは、先生が助教授として文学部に着任された1993年の春、箕面の居酒屋での歓迎会だったと記憶しています。同じ年に寺本成彦先生が助手に就かれ、新たな体制になった仏文を高いお声で熱く語られる柏木隆雄先生の横で、低音の美声を響かせて笑われる和田先生の柔らかさは印象的でした。最初の年の講読演習はヴァレリー「精神の危機」、そして翌年はフロベール「エロディアス」。いずれも難解なテキストで単語の意味を調べても中身はちんぷんかんぷん。ですが手こずる学生の訳読に根気強く耳を傾け、ときに眼光鋭くも、あくまで穏やかに誤りを正し、淡々と読み進めて行かれる和田先生のテンポは常にアンダンテ、心落ち着くものでした。大学院ではテーマに関連する作品を学生が分担して分析発表する演習がとりわけ面白く、「自伝文学」でのルソーやレリス、「短編小説」のモーパッサンなど、多様な作品と視点に触れる機会を与えてくださいました。

93年に仏文に進んだ学部生が私一人だったこともあり、先生方先輩方には随分甘やかしていただき、あの頃の自分の怖いもの知らずの生意気さは思い返すだけに恥ずかしいものがありますが、なかでも当時、和田先生と同じ合唱団に入っておられた助手の黒岡浩一さんや、阪村圭英子さん、安藤麻貴さんたちと、「和田先生のお茶目なところ」についてお喋りするのが大好きでした。人前でも目立たずさりりと塗られる「リップ（クリーム）和田」の妙技。焼き鳥は串から外し、揚げ出し豆腐を巧みに等分する「わけわけ」の気配り術。宇多田ヒカル（1999年発売「First Love」の衝撃）や宮部みゆきを好まれるちょっぴり「ミーハー」なところ。



留学中、サバティカルでパリにいらっしゃった折にはアパートマンにお招きくださり、ぷくぷくとしたオマールを一人一尾の大盤振る舞い。安藤さんと共に大感激したことも今となっては自慢のひとつです。

2007年から3年間、助教として仏文に置いていただいた期間は、柏木先生のご退職記念事業と研究室の一時移転もあって、私自身は祝祭的な慌たしさを楽しむばかりの毎日でしたが、どんなときでもご自分のお仕事については全くぶれることのない和田先生の穏やかさは驚異的でした。基礎工学部 G 棟の仮住まいの研究室をお一人でてきぱきと片付けられ、マイクロリーダーでブルーストの草稿に向かわれるお姿には静かな凄みがありました。

さて、homme de lettres としての和田先生については文人の方々のエッセイを楽しみにさせていただくこととして、harmonie 方面で一点ご報告いたします。古い外付けハードディスクを探索し、2007年6月に研究室でのお誕生会で披露された、和田先生のギター弾き語り音源を発掘しました。高校時代に京都 KBS ラジオ「アクションヤング大丸」の勝ち抜きコンテストで初代年間チャンピオン (!) になられたという貴重な一曲です。爽やかな A メロに続く「さかさまに／まわる世界／鏡のなか」というサビの途中、照れながら止めてしまわれたのがまことに残念でなりません。和田先生、これからもますますお元気でご活躍くださいませ。そして願わくば歌の続きを是非、お聴かせくださいますように。

((公財) フランス語教育振興協会)

## 鉄人？

道廣 千世

思い返せば和田先生には7年ほどお世話になり、その間進路諸々でご相談にのっていただいた事がありましたが、一対一でお話する中私が感じたのは、「和田先生って鉄の人……かな？」という事でした。確かに和田先生は優しい方ですが、その優しさの中に、良い意味で、他者を寄せ付けない厳しさのようなものがあり、余所で裏話など聞くと、そうした厳しさはおそらくご自分に対する厳しさから生まれているのかも、と思います。ひょっとすると、あの時覚えた「鉄の人」という印象は、「甘ったれるんじゃありません」という先生の無言のメッセージだったのかもしれませんが……いずれにせよ、先生は数少ない「格好良い大人」のお一人で、私もこういう風に年を重ねたいものだ、といつも頭の隅で思っております。

(大阪大学博士前期課程在学中)

## 6年間、そしてその後も

森 康晃

「ブルースト読み始めたの!？」

一回生の一般教養の授業が終わった後、『失われた時を求めて』を読み始めたとき、嬉しそうな和田先生の表情を私は今でもはっきり思い出せます。その後の約5年間、私はブルーストにどっぷりつかることになります。

ブルーストの講義で先生が絶えずおっしゃっていたことが、「ブルーストも、私たちと同じ感覚をもった人間だ」ということです。私自身も、つい人に説明する際に、小説の中で描かれる度外れた経済感覚や上流社会のスキャンダラスな側面を語ってしまいがちですが、読み進めていくと、そこにあるのは、普遍的な人間の心理や性向だということに気づかされます。『失われた時を求めて』を読みながら、「ゲルマンのほうへ」で延々繰り広げられる夜会の場面を、参加したくもないサークルの飲み会に、世紀の名曲が演奏されているのかかわらず、恋人の浮気を心配する「囚われの女」の主人公に、演奏会中に演奏会後の夕食のことを考えてしまう自分を重ねたりしたものです。結局、卒業論文や修士論文ではまた異なったテーマを選ぶことになりましたが、ブルーストが書いた人間模様は、大学を出た後の日常を生き抜くための、ちょっとした心の支えになっていると感じます。

卒業論文や修士論文といえば、やる気ばかり空回りして考えは全くまとまっていない私の話を、時間をとってじっくり聞いてくださったことも思い出されます。私が社会人になってからお部屋を訪ねた際に、「ベートーヴェンの資料が手に入った」と嬉しそうに話されていたお姿も思い出されます。

ただ、和田先生の思い出として私の頭に真っ先に思い浮かぶのは、実は、講義



室や研究室などで先生が話されているご様子ではなく、文学研究棟の廊下ですれ違ったときにかけていただいた何気ない言葉です。まだ専修を決めかね、空きコマに色々な研究室を渡り歩いていた頃、仏文研究室の近くを通りかかると「また研究室に遊びに来てね」と声をかけていただきました。いつもお声をかけていただいていたことで、先輩方や研究室そのものの雰囲気もありましたが、仏文研究室はいつの間にか自分にとって非常に居心地のよい場所になっていました。

これは、何も一回生の頃だけではありません。先生はおそらく覚えていらっしゃると思いますが、二回生の頃、忘年会が予定されていた日の夕方、文学部棟一階の椅子に座っていた私に、「忘年会来てくれるんよね」と声をかけていただいたことは忘れられません。先生はその時、特別な気遣いがあって声をかけていただいていたのではないと思います。ただ、このちょっとした声掛けで、サークルの裏方仕事で失敗して気落ちし、呆然としていた私は気を落ち着け、忘年会を楽しみ、悩みをしばし離れることができたのです。

私だけでなく、多くの学生にとって、学問の師匠であるのと同時に、フランス文学研究室という素晴らしい環境を与えてくれたのが和田先生だと思っています。本当に長い間ありがとうございました。

(博士前期課程修了(2016年))

## 和田章男先生への感謝

山上 浩嗣

和田章男先生は私の一生の恩人である。日ごろ口にする機会もないので、この場で私の心からの感謝と敬愛の念を記しておきたい。

私が阪大仏文の一員に加わったのは、和田先生のご推挙による。私に声がかかったのは、ひとえにこの研究室が旧来パスカル研究の世界的な重要拠点であり、私がパスカル研究者であったことによる。伝統の継承を託されたのだ。だが私は当時博士論文也未提出で、ろくな研究業績もなかった。法外な評価に有頂天になったものの、自分に務まるのかという不安はぬぐえなかった。

2010年4月に准教授として着任したが、案の定、和田先生の信頼にはとうてい応えられなかった。授業では学生から頻繁に誤りを指摘され、事務仕事は助教や助教代理(今はコースアシスタントと呼ぶ)に頼り切り、研究会や懇親会の進行ではしどろもどろになり、フランス人による講演会ではしばしば出鱈目の通訳をした。だがこの10年間、和田先生は私の不手際や非礼を一度たりとも咎めることはないどころか、つねに労いの言葉をかけ、人前では立ててくださった。

誰もが知るとおり、和田先生は、超人的な仕事をこともなげにこなされる。ご苦勞や不平を一切口にせず、顔にも出されない。和田先生は私の着任以後、学内

外でさまざまな重職を担われ、多忙を極められるようになった。なかでも、2012年度からの2年間は文学研究科副研究科長、2014年度からの2年間は研究科長を務められた。相当なストレスがあったのだろう、研究科長在任中の2015年夏、胃腸の病気で緊急入院された。見たことがないほど青い顔をして病床に横になりながら、同行した私にご自身の不在中の用務を短く指示すると、あとは見舞いも拒まれた。十日ほどのちには、何事もなかったように研究科長室に座っておられた。

研究面でのご業績については本誌の巻頭言で触れたのでくり返さないが、国際シンポジウムで過去に十回を超える発表をこなされ、プルースト関係の単著を3点、共編著を3点（そのうち5点がフランス語）刊行された。これだけでも驚異的である。

ふだんの授業では、フランス語原文の精密な読解方法の指導に心血を注ぎ、基礎的な文法の復習の重要性をくり返し説かれた。学生の研究発表のときには、とくにメモを取る様子もないのに、いつも詳しく的確な助言を与え、鋭い質問をされた。その際必ず、同じ学生の過去の研究内容を踏まえてその進展状況についても講評された。ガリアの研究会でかつての学生が発表するときには、その人物の何年も前の研究について言及された。数ヵ月前の発表のことも思い出せないことがある私は、いつも不思議でたまらなかった。

宴会時には愛犬の世話のためたいい早めに家路に就かれたが、年に一度の研究室合宿のときには、学生たちといっしょに夜更かしした。昼の遠泳（和田先生は知られざる水泳の名手である）の疲れも見せず、カードゲームの「大富豪」に興じるのだ。和田先生が異様な闘志を燃やされるので、私も学生たちも本気になる。ゲームはいつも午前2～3時まで続いた。



毎年1月には、学生たちをご自宅に招いて新年会を開いてくださった。宴会用に特別に整えられたテーブルには、心づくしのご馳走がずらりと並んでいた。いつもその日に合わせて美容院に出される3匹のトイプードルが、店員に連れられて夕方に帰宅すると、ある学生は膝の上に抱き、ある学生は逃げ回り、大騒ぎになる。和田先生は目を細めて3匹を撫でたり叱ったりする。ところで、先日その一匹のチャチャが亡くなり、和田先生はひどく気を落としておられた。今は少しは立ち直れたのだろうか。

このように、和田先生は、ご自身の研究には妥協なく全精力を注ぎこみ、大学の運営の仕事には極端を避けて合理的に対処し、学生には慈父のような愛情をもって、厳しくも貴重な助言を与えられた。そして、同僚の私には、決して上からものを命じることなく、対等な研究者として過分な敬意をもって接してくださった。以前に拙著を進呈したところ、ご講評を文書でいただいた。そこに、「時折厳格すぎると思えるパスカルの思想に対しては、モンテーニュやヴォルテールの声を借りながらも、やんわりと批評するなど著者自身の「柔らかな」批評精神が感じられ好ましく思えました」とあった。そうありがたいと思っていたので、とても嬉しかった。

和田先生ほど、理想の上司と呼ぶにふさわしい人はいない。身近で10年間を過ごすことができた私はまことに果報者だった。和田先生、これまで本当にありがとうございました。ご退職後も、研究室のことを忘れずに、どうか引き続きご助言をたまわりますようお願いいたします。

(大阪大学教授)

## 和田先生の思い出

山本 健二

私が2008年にフランス文学研究室の博士前期課程に進学してから博士後期課程を単位修得退学するまでの8年間を振り返ってみると、学生としてだけでなく、和田先生の授業のティーチング・アシスタントや、研究室の事務補佐員としての1年間など、私が最も多く接した先生は和田先生でした。

最も印象に残っている授業は、院生を対象にしたボードレールの「現代生活の画家」やブルーストの「スワンの恋」の演習です。先輩と一緒に受講する演習にはいつも緊張感がありました。私が担当になったときは、和田先生から鋭いご指摘があり、的確に答えられないことが多々ありましたが、和田先生のご指導の下、テキストの読解力を鍛えることができました。とりわけ構文や文法に関する質問に正しく答えることができなかった私に言ってくださった「一見、フランス語の文法を逸脱し、アクロバティックに書かれている文章に見えるかもしれないが、

細かく見ると文法通りに書かれている」というご指摘を今でも思い出すことができます。そして和田先生の絵画や音楽、当時のフランス社会に関する豊かな知識によって作品が解説されることで、難解な文章と作品の中に描かれている世界がつまびらかにされ、小説の人物たちが生き生きと蘇ってきた時の感動は今でもなお思い出すことができます。初めての研究発表では、私の勉強不足などもありテキスト分析に不十分なところが多くあったのですが、その時に和田先生がおっしゃった「まずはテキストを一語一語しっかりと読むことが大切です」という言葉が今も心に残っています。私は文学部出身ではなかったため、入学した当初は右も左もわからず、また講義や演習の予習や復習に追われ、2年間で修士論文を完成させることができるのだろうかと不安を感じたり、自信を無くしそうになったりすることがありました。しかし、和田先生のご指導を通して、文学作品を読み解く楽しさや、研究に対する姿勢や面白さを教わることができました。その結果、博士後期課程へ進学する決心ができ、そして今も文学研究を続けることができているのだと思います。

大学院に入学して以来、いつも身近なところで指導してくださった和田先生が今年度でご退職されることで寂しく感じることもあります。和田先生に教えていただいたことを常に忘れることなく、今後も研究を続けていこうと思います。そして今度は私が読む楽しさや興味深さを多くの人に発信していきたいと思います。

(近畿大学非常勤講師)

## 和田さんとの思い出

吉井 亮雄

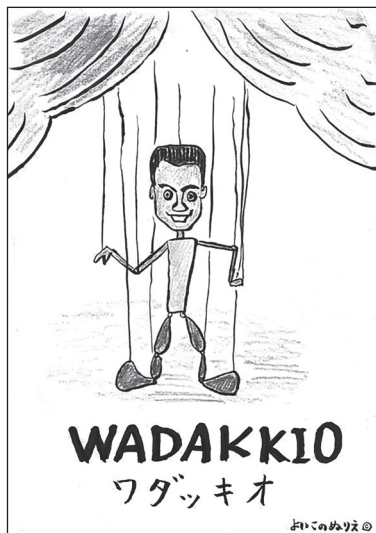
学部時代を東京で過ごしていたせいもあるが、私は日本では和田さんとほとんど面識がなかった。だが、1982年の秋にフランス政府給費生の同期としてパリ＝ソルボンヌに留学、しかも共に『小説の危機』で名高いミシェル・レーモン先生の指導を仰いだのを機にすぐに親しくなった。そして交流が深まるにつれ、和田さんと私たち夫婦はまさに肝胆相照らす間柄となったのである（居住申請をしたパリ市南端の国際大学都市では、本部の決定により、私たち夫婦は前年からカップル入居が認められていた日本館に、和田さんはそこから遠く離れたフランス・プロヴァンス館に割り振られていた）。

当時のレーモン先生はとりわけブルーストへの関心がつよく、大学院のゼミの内容もこの作家に絞られていた。それだけに水をえた魚のごとく積極的に発言し、堂々と論陣を張る和田さんはまさにゼミのエースだった。いっぽう私はといえば、早口で交わされる議論にまるでついてゆけず、ひどく情けない思いでいた。レー

モン先生としても私の無能ぶりには呆れておられたらろう。ただ、ある時ジッドについてフランス語で書いたものをお見せしたら、それまでの態度が一変し、以後は実に親身に接していただいたが。

和田さんほど気持ちの切り換えが早く、また巧みな人は滅多にいまい。今でもそうらしいが、週末はまったく研究から離れ、もっぱら心身のリフレッシュにつとめていた。土曜日の昼過ぎには電話がかかってくる、「今晚、遊びに行ってもいいかな」。待ってました。もちろん私たち夫婦に異存はない。やがて和田さん来訪、あれやこれやを話題にしながら、妻が準備した食事をとる。お酒は貧乏留学生とあってテーブル・ワインだが、当時は本当に美味しいと思った1リットル入りの瓶を毎回2～3本は空けていた（あのこと愛飲していた「ビヤンヴニユ」という安ワインは今でもあるのだろうか）。食事のあとはトランプ（別項「岩根さんとの思い出」でも触れるが、途中からは1年遅れで大学都市の住人となった岩根さんが日本から持参してきた花札がこれに取って代わる）。明け方までゲームに興じ、煙草を吸いながら帰ってゆく和田さんの後ろ姿を、夫婦して日本館4階の窓から見送るのが恒例となっていた。パリ滞在3年目の半ばに和田さんが大学都市を去り、市中のアパートマン（屋根裏部屋）に移るまで、1年半ほどは私が定期的に彼の散髪をしていたことも書き添えておこう。

和田さんと私たち夫婦は何度も一緒に旅行にでかけた。たとえば南仏を訪れた夏のヴァカンスでは、安宿に泊まりながら、地中海沿いの行楽地を毎日のように移動し、街なかを散策、また泳いだり、浜辺でカード遊びに興じたり。節約のためレストランでの食事は2日に1度ほどだったろうか、あとはスーパーで食料や



ワインを調達して、すでに人影もまばらになった浜辺で夕食を楽しんだ。傾きゆく夕日と寄せくる波を前にしての食事は最高に贅沢な一時であった。

とはいえ留学の目的はあくまでも博士論文の完成であり、達成すべきその目標は次第に頭上に重くのしかかってきた。図書館に通って調べ物をするよりも、自室にこもって一枚一枚、原稿を書き進める日々のほうが多くなってゆく。懐かしきはあるが、その頃のことを思い出せば「肌寒し」の感慨もまた禁じえない。

当時としては早いほうに入るだろう、和田さんは3年と少しで論文を書き上げた。『失われた時を求めて』冒頭部のタイプ原稿の執筆時期を確定した論証は従来の通説を根底から覆す、真に画期的な業績となる。公開口頭試問で審査委員長をつとめたブルースト研究の泰斗ジャン＝イヴ・タディエ教授が和田さんの論文を評して、「C'est une date !」と高らかに宣したことは忘れがたい（この博士論文が後にバリの名門出版社シャンピオンから公刊され、絶賛を博したのは周知のとおり）。友人の誉れを慶賀しつつも、それからまだ1年あまりは悪戦苦闘を続けることになる私としては何とも羨ましいかぎりであった。

帰国してからは、互いに母校の助手からスタートし、次いで語学教師をつとめ、やがて文学部（仏文科）に勤務するようになってからは、集中講義に呼んだり呼ばれたり。私の場合はともかく、和田さんの講義は学生たちの人気の的だった。

また2018年には、私にとって2つ目の博士論文を大阪大学に提出させていただいたが、和田さんは多忙を極めるなか、快く主査を引き受けてくれ、ほかの審査員の先生方への依頼方を含め、万端拔かりなく審査に当たってくれた。先生方から望外の評価をいただいたのはありがたく、それだけになおのこと「持つべきものは友」と深く感じ入ったものだ。

私は1年早く定年で退任したが、いつまでも若々しい和田さんがこのたび定年を迎えるというのはどこか不思議な感じがする（何年か前の会話で当人は「若く見えても中身はガタガタ」とか言っていたが）。だが昨年暮、あるパーティーで一緒になったさい、期せずして次のような述懐が互いの口をついて出た。「はるか先のことと思っていたが定年までは案外早かった」、そして「将来に対する不安をかかえながらも、色んなことを一緒に経験したあの留学時代がまさに僕らの《黄金時代》だったね」と。

このたびの無事定年を祝し、あわせて和田さんの益々の活躍を祈念しつつ、このあたりで搁筆とさせていただこう。

（九州大学名誉教授）

## 和田先生の思い出

涌井 萌子

和田先生は私が学部に入學した時に学部長をしておられ、思えばそこらご縁があった。初めて受講したフランス文学の授業は学部一二年生向けの『フランス文学入門』の授業で、ご著書『フランス表象文化史』に蛍光ペンで線を引きながら受けた覚えがある。

研究室に入ってからはお話をする機会も増え、研究室の飲み会でご一緒することもあったし、お正月はご自宅で行われる新年会に呼んでいただいたこともあり、気さくに接してくださる先生であったがやはり、学生の私にとって「先生」であり「研究者」である和田先生のイメージはずっと変わらず「フランス語の一語一文に丁寧に向き合う方」である。

その丁寧さ・緻密さは発音にも訳にも向けられたものであったため、学部二年生で受講した『フランス文学演習』では扱っていたミシェル・レリス『成熟の年齢』のテキストにカタカナで読みを打って備えて臨んでもなお、発表担当の時は声が震えたほど「怖い先生」だった。

修士課程の今となっては、その頃より幾分ましになった（はずだ）が、授業を通して学んだ「フランス語と向き合う際の緊張感」は先生からいただいたもののうちで一番の宝であり、今後フランス語を読み続ける限り持ち続けたい態度だと思っている。

春になれば文学部本館四階、端から二番目のお部屋に先生がいらっしゃり、そこからクラシックが微かに聞こえてくるという私にとっての当たり前の光景が変化してしまう。先生のお部屋の前にある研究室を訪れた時、そこが無音であるということの寂しさは今から想像しても余りある程だが、先生が長くいらした大阪大学を離れて、新しいところでクラシックをかけながらフランス語に向き合われるのだろう新たな光景に思いを馳せつつ、教えることができた幸福に感謝し、教えていただいたことを糧に歩みを進めようと改めて、背筋を伸ばす次第である。

（大阪大学博士前期課程在学中）

## 岩根先生との思い出

安達 孝信

私が岩根先生の授業に初めて出席したのは、学部3回の頃だった。現代フランス語もおぼつかなかった私にとって、デュ・ベレーやロンサールの詩は非常に難しく、毎週無理やりに訳を絞り出したものだった。先生はその誤訳を時には聞かなかったふりをし、時には苦笑しながらも、楽しそうに16世紀詩の世界を私たちにを見せてくださった。

いつもパソコン教室で開かれる先生の授業は他とは一風変わっていた。テキストは紙では配られず、Gallica上で各自検索しダウンロードするようにと案内された。フランス国立図書館の検索システムの使い方を、その重要性も分からないながらも詳細かつ丁寧に教わったことが、その後研究を始める頃に大きな助けとなった。

修士課程に上がると、私は岩根先生の一回生向けのフランス語授業にTAとして加わった。こちらでもまたサイバーメディアセンターの大きなパソコン教室での授業で、理系の学生が対象であったためか、私の知っていた語学の授業とは相当違った空気が流れていた。授業が始まるとすぐにこれまで学んできた文法事項についての小テストを実施し、テキスト上ではなく画面上の教科書で練習問題を解いていった。そこでは自宅学習と授業の役割が時に反転させられ、有機的に組み合わせられていた。

何よりも特徴的だったのは、先生自身が開発した動詞活用練習用のWebページ「活用虎の穴」を使った動詞活用習得法だった。制限時間内に何問解き、どのステージにまで上がることができるか、とゲーム感覚で競い合う工夫がされており、活用テストの時間には静かな闘志が教室のそこかしこから漂っていたように思う。私は今でも語学試験の前などに、このページで練習している。「こんなページなど必要なくなるまで練習しよう」という指示には、いまだに応えられていない。

岩根先生は夏休みにはよくパリに来られるため、私が留学を始めてからも、むしろより一層、先生のお世話になった。国立図書館ですれ違うと、昼食や夕食会に誘ってくださり、パリの街路樹の植生から留学時代の思い出までいろいろなお話をしてくださった。特に、慣れない異国で疲弊していた時期の私にとっては、先生が奥様と用意された暖かな夕食会は、パリもまた大阪と同じ空の下にあるのだと実感する、何事にも代えがたい心の支えとなった。

(大阪大学博士後期課程在学中)

## 親愛なる「岩根隊長」へ

石井 啓子

昭和49年、希望に燃えて(?)大阪大学に入学したものの、世間の学生運動より遅れて、学生寮の費用負担の問題で教養部はストに突入。その余波で、学部進学が半年延期され、私たちの学年は、進学先も決まらないまま宙ぶらりんの状態におかれることとなりました。

行き場を求めて、教養部生にはいささか敷居の高い文学部の建物に足を踏み入れ、うす暗い廊下をさまよひ、おそろおそろ仏文研究室の扉をノックした日のことは今もはっきり覚えています。こちらの緊張ぶりとは裏腹に、脱力するほどのフレンドリーさで部屋に招きいれていただき、たしか、コーヒーすら淹れていたような・・・。壁面という壁面を埋める夥しい数の原書、フランス語の走り書きのあるホワイトボード。初めて目にするそのアカデミックな部屋の中で、眼鏡の奥の、鋭く、ちょっぴり妖しい目を、やや伏せ気味に、ポツリ、ポツリと、ご自分でご自分の言葉にフンフンと納得し、ご自分でご自分の冗談を面白がりながら、若さと老成ぶりが奇妙に同居した独特の関西弁の口調で、迷える新参者の相手をしてくださったのが、ほかならぬ岩根さん(年齢不詳!)でした。

しだいにわかってきたのは、この方は、なんと、仏文の院生でも学生さんでも(ましてや、先生でも)なく、歳も私とほとんど変わらない理学部の学生さんだということ! それなのに、まるで主<sup>めし</sup>のように、この部屋になじんでいる! 好きなことをするために、あてはめられた枠など悠々超えて、自分の居場所を自分で見つけるというのは、当時の私にはとても新鮮なことに思えました。これぞ、大学ではないか! 私は決心しました。仏文科に学びに来よう、というよりは、不思議な魅力に溢れた、自由なこの部屋にまた来よう、と。そのあと何年もこの仏文研究室に通うようになったのは、じつは、岩根さんのおかげなのかもしれません。

多士済々の先輩や後輩の皆さんとも、岩根さんを通じてお知り合いになりましたが、思えば、岩根さんは(たとえ冗談はキツくても!)どなたのこともけっして悪くおっしゃることはありませんでした。その根底には、つねに相手に対する敬意と公正な判断が感じられました。あるコミュニティーに、そんな風に導き入れていただくこと、それがどれほど有難いことであるのかは、やがて世間に出て、身に沁みてわかることになりました。

先生方は、高く仰ぎ見る、まさに畏敬の対象という存在でしたが、岩根さんの見事な「ものまね」(声色や形態だけでなく、いかにも先生方がおっしゃりそうなことを創作する徹底ぶり)をたっぷり見聞きさせていただいたおかげで、おのずと親しみを覚え、お話しさせていただくときにも、肩の力が抜け、よけいな構えが取れて、謹厳な先生方の温かさに驚くほど素直に触れることができたのだと思

います。

理学部から正式に仏文に専攻を変えられた岩根さん。理系の頭脳で16世紀文学の研究に成果をあげられ、言語文化部の先生として待兼山に根を下ろされました。阪大を訪れるたびに、最初の出会いの時と同じように、「当たり前のようにそこにいる」岩根さんにお目にかかることができたのは、ほんとうに幸せなことでした。

夏の和具合宿のことを、時々思い出します。夜は酒盛りと花火、昼間は、海に飛び込んだり、「岩根隊長」のもと、島の周りをボート（漕いだのは私！）で探検したり。ほんとうに楽しかったです。リタイア後、またみんなで和具旅行（こんどは、合宿ではなくシルバーツアーかな？）ができれば嬉しいのですが、岩根さん、いかがでしょう？

（翻訳家・慶応義塾大学講師（旧姓 今井））



和具にて

## 岩根先生の探究心

石井 真奈

先生という充実した授業用ポータルサイトを思い浮かべられる方も多いのではないだろうか。テスト対策からWeb辞書、数字の聞き取り、のちに本にもなった動詞活用徹底練習ページ「活用虎の穴」など多種多様なコンテンツが並び、ちょっと面倒な反復練習を楽しくできるように工夫がなされている。紙媒体とデジタル教材との融合に早くから着目され、日々進化する電子教材をさっと実践に取り入れていらした。iPadが設置された教室では、クイズ番組のように全員の解答を集めて並べたり、学生のグループごとにテキスト会話を撮影したり、紙だけでも電子教材だけでもないありかたを伺うたび、大いに刺激を受けていた。

また、刺激を受けていたことはそれだけではない。編集者という人種は酒が好きなのか、酒の場が好きなのか、どちらにしても人の交わる愉快的場が好きな人

間が多い。そして恐ろしいことに(?) フランス語・フランス文学を生業とされている先生方は、編集者以上にお酒の場が好きの方が多い。私の日本地図は、幸せなことに、そんな先生方から教わった美味しいもので出来ている。そして先生はそんな有難い先生のおひとりでもある。

学会の懇親会等ではいつも「最近はこのしく飲んでいますか」と暖かく声をかけくださる。また時には新しく発見されたお店をそっと教えてくださり、その都度アンテナの高さに驚かされるばかり。梅田のとある商店街の小さな日本酒のお店にご一緒させていただいた際には、こんな飲み方があったのか! と衝撃を受け、その場でオーナーの著書を二冊購入してしまったほどだ。日々更新される先生のデータについて、ある日伺ったところ、ふらりと立ち寄られたお店でもヒアリング調査を欠かさないらしい。その時も、私の上司が話した岐阜のお店について、さっとメモをとられていた。メモをとるだけでなく、日本各地に赴く際は、気になるお店を中心に宿を探し、その周辺を探索されるという。たゆまぬ情報収集とそれを実践される姿勢に、お会いするたび我が身を反省する。

そして、先生のたゆまぬ探求を思うとき、思い出すことがある。十五年以上前に阪大フランス語部会の先生方が初めて『新・フランス語文法』(教科書)を刊行されて以降、三訂を数える今でもこの本の表紙の下の方にいる生物をご存じだろうか。ガリミムス、「鶏ににたもの」という意味をもつ恐竜である。このフランスの国鳥の祖先といわれる生き物を、表紙に加えたのが岩根先生だったそう。ガリミムスが徐々に洗練されていき立派な雄鶏になるさまを想像すると、なんだかユーモラスで愛おしい。

(朝日出版社フランス語テキスト担当)

## 岩根先生さようなら

井元 秀剛

私にとって岩根先生の思い出はつきない。赴任した当初から今日まで公私にわたってともかくお世話になった。私にとって岩根先生は言文の中で最も親しくさせていただいた先生である。まず何よりパソコンの先生であった。これは何も私に限らず、多くの同僚にとってそうだろうと思う。もともと理科系の学部に入學されたぐらいだからパソコンやインターネット、機械などにとってもお強い。私が赴任した頃はまだ黎明期で、Windows95はまだ出ておらず、インターネットも電話回線につないでいるような時代だった。Dosのコマンドを打ち込み、5インチのフロッピーディスクをいれて再履修生のクラス配分などをするのだが、職人芸の世界で、フランス語教室でおできになるのは岩根先生お一人、ほとんど専任で担当されていた。私もやり方を習って交代してさしあげようと思ったのだが、な

にせ1年に1度だけの作業、翌年にはほとんど忘れていて続かない。そのうちコンピューターもGUIベースのものに変わり、広く一般業務に使われるようになり、Dosでの作業はなくなった。それでも最初のうちはパソコンがよく動かなくなり、岩根先生に何度も研究室に来ていただいて調整していただいた。私は今でこそパソコン自体も自作、Officeソフトは縦横無尽に使いこなせているが、岩根先生がいなければ、そうなるまでにかなり時間がかかっていたと思う。

岩根先生は人間的にも大変すぐれておられ、誰ともうまくやっていくし、どんな頼み事でも快く引き受けてくれる。そんな性格だから学内でもややこしい仕事はいつも回されていてほかの人より何倍も働かれていたのではないだろうか。私もパソコンに限らず、家具の移動など個人的な引越しの手伝いや父母の荷物の運搬までしていただいた。非常勤先も一緒に長年車に同乗させていていただいて、たくさんのお話を学ばせていただいた。結婚式の司会をお願いしたのも岩根先生である。

さまざまな雑務を積極的に引き受けておられる一方、教育に対する熱意もひとしおで、先生のホームページを授業に活用させていただいている先生は本学に限らず多いと思う。私もその一人で、今でも使わせていただいている。楽しかったのは「活用早打ち大会」である。文法の授業でどちらもcall教室を使っていたから、二人のクラスの学生を一度に全員集めることができる。そこで、先生のホームページにある「活用虎の穴」を使って、直説法現在形の活用を1分間にどれだけ正しく早く打ち込めるのかを競争させるのである。クラス対抗戦のような雰囲気になるから、やらせている方も熱が入る。二人でポケットマネーを出し合って優秀者に景品を出したり、賞状を作ったりして、教師の方が盛り上がった。競争は共通テストというものもあってそのクラス平均点がでるから、二人でよく勝ったとか、負けたとか騒いだものだ。ほかの先生とはこんな学生同士のゲームのような話はしないから、二人の感性があうということなのではないか。ともかく、岩根先生となると楽しい思い出が次から次へとわいてくる。赴任してから今まで



ずっと一緒だったので、もうお別れかと思うと、なんだか信じられないような気がする。「さようなら、でもお家も近いのでまた時々顔をだしてください」、最後はそんな月並みなことばで締めくくるしかない。

(大阪大学教授)

## 岩根先生のご退職に寄せて

岩村 和泉

1996年の入学当初、第二外国語はフランス語と心に決めていた私が最初に受けたのが、岩根先生のフランス語文法の授業です。ときにユーモアを交えつつ、高い水準でありながらテンポよく明るい雰囲気の中で、綴りと発音の関係から単純過去まで集中して学ぶことができました。教科書や辞書をひっくり返しつつ、練習問題に取り組んで過ごした時間の記憶は今でも鮮明です。1年という短い期間ではありますが、先生の授業は、私のフランス語の基礎を作り、フランス文学を専攻するという漠然とした希望を、決心に変えました。後に同じ授業を担当させていただくことになった時、私の頭の中にあった、そして今でもあるお手本は、岩根先生の授業です。要点を押さえた簡潔さとレベルの高さを両立した先生の授業は、どのようにすれば可能なのか、自分が教える立場になってつくづく感心しつつ、いまだ試行錯誤の日々です。先生の開発された「活用虎の穴」「数字虎の穴」を授業中に大学生に勧めると、大抵「虎の穴？」という顔をされるので、『「タイガーマスク」っていう漫画があつてね…」と説明して怪訝な顔をされることも、もはや日常生活の一部になりました。

最近では、今年度担当している法・経済学部向けの地域言語文化論の授業についても、相談に乗っていただきました。これまでとは違う枠組みの授業で不安しかなかったのですが、先生とお話させていただいて見通しが明るくなり、楽しく取り組んでいます。コミュニケーションの要素を取り入れるにあたり、先生のご助言を受けてデジタルも駆使した結果、1限の授業であるにもかかわらず出席率が好調で、現在5人の受講生が仏検3級合格を目指して頑張っています。岩根先生が教えてくださったフランス語学習の楽しさを、少しでも多くの学生に伝えられるように、これからも尽力していきます。

(大阪大学非常勤講師)

## 心優しい文理融合の友

柏木 隆雄

岩根さんを初めて見たのは、彼が理学部の学生で、仏文の研究室にしょっちゅう出入りしていた時だと思う。私は1975年3月まで仏文の博士課程に在籍して週に1回は学校に出ていたから、おそらく彼が学部2回生くらいの時だったか。もちろん私は彼を仏文の3回生だと信じていた。いかにも仏文専攻生のように周りの人間と気楽そうに話をしていたからだ。しかし「理学部なんですよ、仏文の雰囲気が好きなもの」と、確かそのように笑いながら言ったような気がする。あるいは原亨吉先生も黙認の闖入者ではなかっただろうか。理学部生ということで親近感を持たれたのかも知れない。

神戸女学院大学に着任してから結構忙しくて阪大の研究室にはご無沙汰だったから、岩根さんが理学部を卒業したのちに、本当に仏文の学生として修士にも入り、博士課程に進学していると知ったのは、助教授として着任して再び彼を研究室で「発見」してからだ。病が高じたな、とその時彼に言ったような気がするが、おそらく彼は忘れていることだろう。もっとモダンなアポリネールとかジャリとかいった作家をやりそうに思ったけれど、16世紀のロンサルということで、岩根さんはちょっとおっとりしたところもあるから、本格的な研究が彼に合っているのだろうと納得した。当時いよいよその特性を発揮するようになったコンピューターの文系学問への応用について、理学部出身の彼は何よりも強い関心と知識をもっていたから、折しも新しい研究組織として発足した言語文化部に採用されて、得意とする数理とフランス文学との「幸福な融合」に進むことができたのは何よりのことに思われる。その上イタリア・ルネサンスから17世紀文学までの広い視野をもつ高岡幸一さんが先輩同僚としておられたから、いっそう環境としては充実したものとなったはずだ。高田勇先生が始められた「ロンサル研究会」でも熱心な会員として研究成果を示すとともに、高田先生亡き後、他の専門家たちと



さらに会を盛り上げるリーダー役を担っているのもまことに頼もしい。

岩根さんは都会人らしい優しさと気配りの人だから、緊密な言語文化部フランス語チームの中でも、人一倍融和に気を遣い、率先してチームワークの形成に力を尽くして、結構神経を磨り減らしたりしていたのではなかろうか。こういう私自身、いろいろな形でガリアの研究会の運営に力を貸して貰った。個を尊重しながら、皆親しく一致しての行動を惜しまない阪大のフランス語学、フランス文学教員の雰囲気や、私は他の大学の人に大いに自慢してきたが、それは一にかかって皆の心優しい協力のおかげであって、なかでも目立たないところでの岩根さんの心配りは有り難いものだった。コンピューター関係のややこしいことは何でも彼に相談すれば解決すると、よく難題を持ち込んだけれど、あるいはそのことで本来文学的センスの横溢する岩根さんを邪魔することになったかも知れない。

じっさい岩根さんに書いたものを送ると、必ず感想を頂けて、しかもそれと関連していろいろ派生的な文学事象についての蘊蓄を教えて貰える。バルザック『暗黒事件』の翻訳本の解説に映画『真昼の暗黒』を引き合いに出して松川事件と結びつけたヘマを、たちまち「八海事件」だと匡してもらって、この度の重版の機会にやっと訂正できたのも彼のおかげだ。

文学的営為ばかりではない。岩根さんのフランス語科目のホーム・ページを開くと、フランス語を受講する学生たちに対する実に懇切な指示と応対が構築されていて、本当に親切的な語学教員の一面を見ることができる。大先輩の中村啓佑さんを助けて関西のフランス語教育の様々な集まりに多方面の能力を発揮して活性化に役立っているのも彼なればこそその貢献だろう。

私が阪大の文学部の教員でいた時、一階の合同研究室で仏文卒業生の西田有利子さんとともに、コピーやら資料探し、それに私の雑談のお相手までも勤めて下さったのは、夫人の岩根美千香さんで、彼女の心優しい数々は、その元気で澆刺とした立ち居振る舞い、明るい声とともに合同研究室略称「合研」（今は別の名前になっているようだが）に入るといつも思い起こすが、さて彼と美千香さんの馴れそめの話は、どちらから確か伺ったはずなのに、今思い出せない。また今度彼に聞いてみることにしよう。

(大阪大学名誉教授、大手前大学名誉教授・客員教授)

## ご退職に寄せて

酒井 栞

岩根先生、この度はご退職おめでとうございます。先生には、一年生のときから大変お世話になりました。

先生に初めてお会いしたのは一年生のフランス語初級の授業で、主に文法を教

えて頂きました。フランス語を初めて学ぶにあたり、タブレットでのゲームなどを交えた授業は楽しいと同時に理解しやすく、5分間テストや活用虎の穴といった教材もとても役に立ちました。フランス文学専修に入ることを決めたのも、先生の文法の授業を受ける中でフランス語への興味が増したことが理由の一つです。フランス語学習の入り口として先生の授業を受けることができ、幸運だったと感じています。

また、二年生となり専門の授業を受講するようになってからは、昨年秋・冬学期、ロンサールの詩の授業でお世話になりました。講読はテキストが難しく、なかなか正しく読むことができませんでしたが、先生は詩法や特殊な読み方について分かりやすく教えてくださいました。加えて、私たち学生の意見も積極的に聞いてくださり、意見を出し合う中で一つ一つの詩に隠された意図や技巧などを探っていくのが面白く、詩を味わう楽しさを知ることができたように思います。

今まで本当にありがとうございました。ご退職後もお元気にお過ごしください。

(大阪大学学部3回)

## 岩根先生との思い出

堤崎 暁

岩根先生には、私が大阪大学文学部に入学してから現在に至るまで、常にお世話になり続けてきた。学部一回生の一年間、私はフランス語の授業を週に三つ受講していた。そのうち、初級文法の授業のご担当が岩根先生、「選択外国語」という枠の授業のご担当が、昨年ご退職なされた北村卓先生であった。この御二方からフランス語をご教授いただいていたいなかったら、フランス文学研究室の門を叩くことも、ましてや博士後期課程に進学してフランス文学の研究を続けることなどなかったのではないかなと思う。

私が大学院に進学してからの思い出と言えば、TAとして先生のお手伝いをさせていただいたことがやはり印象深い。博士前期課程に進学してから現在までの三年間、ほとんど毎学期、岩根先生が担当されているフランス語初級文法の授業にTAとして参加させていただいた。パソコンやiPadなど、文明の利器を完璧に使いこなして授業を円滑に進められる先生のお姿は、機械音痴の私にとってはまるで魔法使いのように見えたものだった。また、先生の朗らかなお人柄のおかげもあり、学生たちがのびのびと授業に参加していたことも印象深い。何より先生ご自身が毎回楽しそうに授業をされている様子が特に印象に残っている。

先生と一緒に屋外を歩いている時には、様々な植物の名前を教えていただいたり、雲や月など、自然に関わる様々なことも教えていただいた。その影響からか、外を歩く時には植物や空に視線を向けることが増え、以前よりも毎日が少し豊かな

になった気がしている。いつだったか、何かの飲み会の席で、私が博士後期課程に進学することを決めた旨を伝えた時、岩根先生から「堤崎くんが将来どんな研究者になっていくのか楽しみ」だというお言葉をいただいたのを覚えている。先生からのご期待を裏切らない研究者となれるよう、今後も日々精進していきたい。

(大阪大学博士後期課程在学中)

これまでありがとう、そして、これからもよろしく

中村 啓佑

岩根さんとは（長年のよしみで、「さん」と呼ばせていただく）、教室でのご縁はない。にもかかわらず、こんなに長い間、おつきあいをしてくださったのは、いやむしろ、老人のお世話をしてくださったのは、お人柄ゆえであろう。

私は、自分ひとりでは何もできないタイプの人間で、いろんな方にお世話をかけてきたが、岩根さんは、そんな被害をいちばん蒙った方ではないだろうか。

まず、私がパソコンを使えるようになったのは、他ならぬ岩根さんのお陰である。今から20年と少し前、パソコンデビューの私は、トラブルが発生するたびに電話をかけた。どんな小さな問題にも自分のパソコンを開き、懇切丁寧に教えてくださった。文字通り私の先生である。

至近の例を二つあげる。一つは昨年秋、神戸で講演をしたときのこと。パワーポイントを使ったのだが、話の性質上、どうしてもYoutubeの画面を出したかった。岩根さんに解決策を依頼したら、何と、朝早くから講演会場まで来てくださり願いをかなえてくださったのである。

もう一つは、まだ湯気の出る話。今回、北村教授、岩根教授、和田教授記念論文集に投稿することにした。GALLIAには長い間書いたことがなく、執筆要綱も変わっていた。自信のない私は、また岩根さんを煩わせ、要綱どおりになっているか見ていただいた。すると、誤字などを含め、ずいぶん丁寧に見てくださった。

もどって来た原稿を見ながら思いは複雑であった。「だいたい、この論文は、岩根教授を含め三先生への学恩に報い、日頃のご指導やお世話に対する感謝の気持ちを表明するためではないか。それを、ご本人にお世話をかけるとは、何ごとか！」と反省してみたものの、時すでに遅かったのである。

こうした出来事を含め、これまでお世話になった幾多の事柄に対して、ここからお礼申し上げ、今後のご健康とますますのご活躍をお祈りしています。

最後に、一つだけ付け加えておきたい。何事にもきっちりした岩根さんが、いかにげんな私と、こんなにも長い間つきあってこられたのは、一つだけ共通点があるからではないか。それは、二人とも大阪人、人を笑わせることが大好きなことである。多分私がボケ、岩根さんがツッコミだと思っているが、二人が会うと、

いつも自分をネタに話を面白くするのは確かである。

岩根さん、まだしばらくお世話をかけるかもしれませんが、これからもよろしくお願いします。

(追手門学院大学名誉教授)

## 近くの席にいる岩根さん

濱田 明

岩根さんがこの3月で退職される。岩根さんの授業を受け、フランス語を楽しく効果的に学び卒業して行った阪大の学生は数知れないだろう。ガリア会員でも岩根さんからフランス語を学び、フランス語が好きになった人も多いのではない。6歳上の岩根さんから私が初級フランス語を教員と学生の立場で教わる機会にはなかった。初級文法は大高先生に習った。

私にとっての岩根さんは、仏文の先輩、それも学生時代から今日までずっとお世話になっている先輩である。学部3年生の10月頃、「濱田君、ドービニエの何か一緒に読む？」と声をかけて頂き、それから、『春』の「ディアージュへの百頭の生贄」のソネを毎週ひとつずつ読むことになった。ユゲ（16世紀フランス語辞典）は、文例は豊富でも肝心の単語の意味がつかめず途方にくれることも多かったが、この時の勉強会で16世紀の詩を読む手ほどきをして頂いたことは、本当にありがたく、感謝の言葉しかない。

修士に進んだ後、明治大学の高田勇先生を中心に結成されたロンサール研究会にも岩根さんのおかげで参加できた。東京の16世紀研究者との交流も刺激になったが、高田先生の招聘で来日されたランス大学のベランジェ先生の連続講演会に



も岩根さんと一緒に出席し、ベランジェ先生に留学の際の指導を引き受けて頂けることになった。ロンサール研究会は、その後日本ロンサール学会となり、高田先生の後には、岩根さんが会長を務められている。

私が熊本で就職してからは、仏文学会やロンサール学会とは別に、夏休みにパリでご一緒することが多くなった。8月下旬に BnF（フランス国立図書館）に行くと、かなりの確率で岩根さんが近くの席にいる。頃合いを見計らって、話ができるスペースに行くと、数日前から来られている岩根さんはここでも先輩として、図書館の利用方法の変更など丁寧に教えて下さる。ちなみに岩根さんの研究には計量的手法による分析などの他に、BnFでの16世紀に出版された書籍についての丹念な調査の成果にもとづく緻密な研究も少なくない。Gallica など、デジタルデータの形で活字を読むことができ飛躍的に便利になったとは言え、現物を見ないと分からないこともまだ多い。

BnFで一緒になると、その後、お互いのパリ滞在スケジュールを確認し、岩根さんが滞在する高級アパルトマンでの夕食、パリ近郊の散策など、楽しい予定を組むことになる。高級アパルトマンはルクセンブルグ人の友人宅だが、そこで何度も岩根さんの奥さんの美味しい手料理を頂いた。ちなみに、奥さんは私の高校時代の友人のお姉さんなので、正月など愛媛に帰省したときもお二人にお会いすることもある。

岩根さんが退職されると、阪大の学生さん、同僚の先生方は寂しい思いをされることだろう。幸い私は、岩根さんとこれからも同じようにお目にかかる機会があるはず。岩根さん、長い間お疲れ様でした。これからもどうぞよろしくお願いします。

(熊本大学教授)

## 岩根先生の思い出

林 千宏

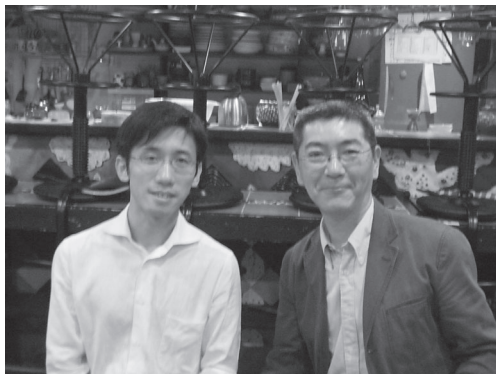
岩根先生はもう7年にわたってブログを続けておられる。そのブログでは日々目に映った植物や季節の風物、風景の写真が、一言のコメントとともに紹介されている。それらの草花や街角の風景は、どれもささやかで、私たちががついつい見過ごしてしまいそうなものばかりだ。だが岩根先生の目を通してひとつひとつの花の名前や由来を知ると、日常の世界がまったく違って見えてくる。私たちのまわりにはこんなにも豊かな世界が広がっているのだと一驚するばかりだ。さらにこのブログを読み続けていると、とある花が去年はいつ頃、どこで、どんなふう咲いていたのかが明かされる。そして、こうしたささやかな変化の積み重ねが、じつは世界を大きく確実に動かしているのだということに気づかされるのだ。

岩根先生と接していていつも感じるのは、この何気ないものへの温かなまなざしである。私なら見逃してしまうものに、先生はかけがえのない価値を見出される。だからこそ、先生は万事にとっても細やかで、あらゆる物事や人に対してつねに興味をもって接してくださるのだろう。先生のこの姿勢は一貫していて、研究、教育はもちろん、学会の業務や大学の学務、そのほかどんなに些細に見える事柄に対してもつねに注意深く緻密に対処されるのだ。これがどれほど大変なことなのか、私が大学で教える立場になった今になって、痛感している。

岩根先生に最初にお会いしたのは1996年の4月。阪大に入学して「フランス語初級」の授業を受けたときである。以来20年以上、フランス語、ルネサンス文学さらには様々な機器を用いたフランス語教授法についてもご指導いただいた。その間、ロンサルについての卒論を指導していただいたことやロンサル学会の合宿に連れて行ってくださったこと、私の留学先のモンペリエを訪ねてくださったこと、パリで一緒にロンサル研究の泰斗Y・ペランジェ先生にお会いしたこと、インターネットを駆使して、パリの岩根先生と大阪の私とでデュ・バルタスの読書会をしたこと、博士論文の審査をしていただいたことなど、数えきれないほどの機会にご指導を受け、お世話になってきた。ただでさえお忙しい先生が、どれだけの犠牲を払ってこれほどのお時間を割いてくださったのかと思うと、感謝の言葉も簡単にはでてこない。その間一貫して変わらず温かい目で真摯に私の研究を見守ってくださってきた。今度は私が後輩となる人に同じように真摯に接しなくてはと思っている。

近頃、岩根先生ならどんなふうにもこのテキストを読まれるだろう、どんなふうにもこの景色を眺められるだろう、と思うことがある。そして先生とお話すると、私が目も向けてこなかったところに注目されていることを知る。先生のまなざしにどれだけ近づくことができるか、私の今の目標である。

(大阪大学准教授)



## 私にとっての岩根先生

廣田 大地

私のはじめて岩根先生にお会いしたのは、2000年に阪大文学部へ入学してすぐ、岩根先生が共通教育で担当されていたフランス語の授業においてである。当時からコンピューターのたぐいが好きだった私がCALL教室という授業環境以上に關心を持ったのは、岩根先生が作製されたフランス語動詞活用練習WEBページ「活用虎の穴」であった。まだ大学生生活に馴染めずに漫然と毎日を過ごしていた私は、フランス語の授業にもあまり身が入らず、あげくの果てには期末試験を欠席をしてしまったりもするのだが、この「活用虎の穴」にはとことんのめり込んだ。情報教育の空き教室や清明寮の自室のパソコンで、上級編の時間制限付きモード「活用名人戦」に挑戦し、飽きることなく動詞活用を入力し続けたものだったが、例えば、そのおかげでタイピング速度が上がった気がする。岩根先生から受けた御恩の一つである。

当時の私にとっての「活用虎の穴」に対する関心はいくらか特殊で、いつかは自分もフランス語学習ツールのプログラミングをしてみたいという漠然とした思いがあった。しかしながらプログラミングの初歩的な知識しか持ち合わせていなかった私には、岩根先生がJavaScriptで組んだ「活用虎の穴」のソースを十分に読み解くことができず歯がゆい思いをしていた。その後、文学研究のかたわらにJavaScriptやPerlなどの学習をしているうちに、すこしずつ知識が身に付き、ついに10年以上の時を経た2012年、岩根先生の「活用虎の穴」を参考にしつつ、フランス語単語練習ページ「フラ単」を作成し、WEB公開することができた。その後、岩根先生が私の「フラ単」をご自身の授業でも使ってくださいっていると聞きし、とても光栄に感じている。フランス語教育・フランス文学の分野における「学恩」というのとは少し違い、むしろ「おたく」的な異世代間の交流といった感があるかもしれないが、学部1年生のころから、私にとって岩根先生は、プログラミングだってできてしまうICTに強いフランス語教育者・フランス文学研究者という、私が目標としている姿の一つを体現しているお方なのである。

近年は、岩根先生のお誘いも受けて、e-Learning教育学会という比較的小規模の学会にも加えていただいているが、そのような場をととして他の外国語ICT教育研究者と交流するうちに、岩根先生の教育・研究スタイルにおけるICTのあり方は、他の方々の多くとは、どこか異なっているような気がしてきている。たとえば、時間と労力の効率化を目標としてICTを活用する人がいれば、労力は問わずICTの活用に刺激を求める人もいる。もしくは自分の思考パターンや哲学を具現化したものとしてICTツールを構築する人など、外国語ICT教育研究者は皆似ているようで、よく見てみると様々なタイプがいる。ひるがえって、私が知っている岩根先生はどのようなタイプなのかと考えてみると、岩根先生のICTツール

の使い方には、少し独特なところがある。少し古くなった表現で言うと「ファジー」と言うのだろうか、なんだか人間くさいところがあり、例えば「活用虎の穴」においては tab キーを 3 回押さないと正解の確認ができないなどの不便な点があるが、それがあつた種の魅力となつてゐるような気がする。

論を少し飛躍させると、そのような人間くさは岩根先生の論文にも現れてゐるのではないだろうか。言語文化研究科のとある論文集において、他の先生方が「コーパス分析」そのものを主題としてゐるのに対して、岩根先生の論文は「コーパス分析」を用いつつも、余談や脱線が充実し、さらには文学テキストへの情熱がにじみ出て、しかし後人へのアドバイスも欠かさないという至れり尽くせりの内容であつた。正直、当時の私はそれを読み、もっとかっちりした構成の論文を執筆されないのであるかと思つたのだが、今となつては岩根先生のような論文のスタイルもアリなのだと思うようになってゐる。むしろ、岩根先生は学域がどんどん細分化してゐる昨今の研究情勢のなかで、他領域をまたぎつつ一つの個性を持った研究者としてあり続けようと意識的・積極的に取り組んでゐるのかもしれない。

そのような、異なるものを結びつけようとする岩根先生の姿勢は、言語文化研究科のフランス語資料室と文学研究科のフランス文学研究室との交流を促してくださつてゐたことにも現れてゐるだろう。言文の先生方のフランス語授業の TA として何度も雇つていただいたこともさることながら、年明けのフランス語共通テストのあとにフランス語資料室で開かれるパーティーにお招きいただいたことを懐かしく思うが、そのような交流会において、岩根先生はいつも縁の下の力持ちとして、準備や企画の中心になつてくださつてゐた。現在、私も神戸大学の国際コミュニケーションセンターという部局に所属しフランス語を教える中で、神戸大学文学部のフランス文学専攻の学生にフランス語の授業を行つたり、彼らを学生補佐員として雇用したりすることがある。他部局に所属する教員として、仏文の学生たちの経験の幅がよりいっそう広がるために役立てればと願つてゐるが、あまり干渉しすぎるのも良くないと自らを戒めるときもある。そのように意識する際、岩根先生のお姿は、いい感じの距離をとりつつ見守つてくださる他部局の先生のモデルとして、私の頭にまず一番に浮かぶのである。

最後になるが、岩根先生には特に留学中、個人的にも大変お世話になつた。2007 年から 2010 年までの 4 年間、博士論文執筆のためにパリ第 3 大学に留学してゐた時は、毎夏、岩根先生が滞在されてゐたアパルトマンに招待していただき、ワインとともに奥様の美味しい手料理をご馳走になつた。博士論文執筆の重圧と、パリでの人付き合いとで荒んでゐた私にとっては、岩根ご夫妻の温かなご歓待は、いつも心を穏やかにしてくださるものがあつた。2009 年の夏に私の妻がパリの民間フランス語学校に通ひに来てゐた際には、彼女も一緒に招待くださり、岩根ご夫妻のように私も幸せな家庭を築きたいと思つたことが、当時はただの後輩に過ぎなかつた彼女との結婚を意識しはじめるきっかけになつたのであつた。

以上のように、私は今日に至るまで岩根先生から数々の恩恵をうけており、そ

してまたこの文章を書いているうちに、あらためて自分が岩根先生からかなりの影響を受けてきたことに気づかされた。しかし、岩根先生の菩薩のような慈愛の心は、いつも自分のことで精一杯な私にはとうてい真似しようがない。今度ご本人に「虎の巻」を伝授していただけないか頼み込んでみようと思う。

(神戸大学准教授)

## 岩根久先生の思い出

深川 聡子

ルネサンスと現代、ハイテクと自然、細やかさと大らかさ。岩根久先生には、反対を向くベクトルの中間地点で優雅にバランスを取りながら、にっこり揺れて飄飄と、そしてどこか懐かしい、木造りのやじろべえのようなイメージがあります。豊中キャンパスの植生に精通され、デジカメと万歩計を携えられた先生の軽やかなフットワーク。眼鏡の奥で眼をきらりと輝かせながらお話をされるときの柔らかな大阪弁。授業にはほとんど出席していない不真面目な学生だったにもかかわらず、岩根先生のご退職をととても寂しく感じるのは、先生がいらっしゃる阪大と北摂の街が私にとって揺り籠のような場所であり、また、先生に教えていただいたことが様々な場面で支えになっているからです。

北摂といえば、2000年代初頭、千里山には眼鏡の名店オプト・ガレがあり、岩根先生の奥さまと、西田有利子さん、林千宏さんも一緒に文学部の合同研究室で眼鏡自慢に興じたものでした。エミール・ガレの器とボンダイブルーのiMacが置かれた瀟洒な店内、職人氣質の眼鏡師のご主人と笑顔が優しい夫人の姿はどこか岩根先生ご夫妻に重なります。思い出をもう一つあげれば、やはりお酒。岩根先生に伝授していただいたのは、当初予算を1000円としてビールと簡単なものを注文し、店の様子を観察してから、良ければもう一杯、そうでなければさりとて退店すべし、という上品かつ合理的な一人飲みの流儀です。いざ実践に移すとなかなか1000円で止まらない審美眼の欠如（あるいは単なる酔いどれ癖）は今後の課題ですが、石橋の小料理屋も、清風荘の大人の隠れ家バーも、朗らかな明るいお酒でした。

東京で仏検の仕事に就いてからは、フランス語教育者としての岩根先生のエネルギーにあらためて開眼しました。北村卓先生とともに仏検を熱心に推進され、団体出願の阪大生の多さは嬉しく心強いものですし、学会の展示ブースではいつも「がんばって」と励ましてくださいました。

日本中の多くのフランス語学習者にとって、岩根先生のお名前は、ネット上の学習プログラム「活用虎の穴」の開発・提供者として知られています。動詞の活用を手指に馴染ませて覚えることのできる優れたトレーニング教材であり、練習

数を重ねると背景が虹の七色で変わっていくところに高揚感もあります。具体的な目標設定とその達成を楽しむ、先生ならではのお仕事です。いちど授業の見学に伺った際、制限時間を設けて受講者全員が一斉にチャレンジする時間帯があり、ゲームさながらの皆の熱中ぶりも見ものでしたが、画面の色の変化が、教室を歩く先生にとっては参加者の進度を俯瞰できる指標として機能していることに気づき、目から鱗が落ちました。なお、2018年に『フランス語動詞活用ドリル虎の穴』として書籍化された際に編集を担当された白水社の西川さんは、かつて岩根先生の授業を受講されていたのだとか。楽しく学ぶDNAの賜物、ここにもあり。

岩根先生の醸される情熱、楽しさと温かさを、少しでも真似て、繋げることができるよう、私も精進してまいります。先生、ありがとうございました。そしてこれからもどうぞ宜しくお願いいたします。

((公財) フランス語教育振興協会)

## 岩根先生との思い出

福野 江里子

シナマンサク、吾亦紅、キュウリグサ、カナメモチにクロガネモチ、岩根先生のホームページには、いつも愛らしい植物の写真が掲載されています。豊中キャンパスに色づくこれらの樹々や草花を、岩根先生は実際の道々で折に触れて示してくださいました。共通教育のフランス語の授業の後、授業を終えられた先生は言語文化研究科棟へ、ティーチングアシスタントを務めていた私は文学部本館へと戻るまでのごく短い行程でしたが、ある時はこちらの道から、ある時はあちらまわりで、岩根先生とともにキャンパスの季節を追うことのできたひとときは、その頃の日々のかけがえのない彩りでした。

そんな先生との散策が、パリにおいて叶えられたことも忘れられない思い出です。初めて国立図書館を利用する私を伴い、岩根先生は、アルスナル図書館で16世紀の文献を間近に繙いてくださいました。書物に眼を落とされている先生の傍で、感嘆を覚えながら私が思い出したのは、キャンパスで植物を見つめておられた先生の姿です。岩根先生が自然に対して向けられていた詩情は、あくまで論理的な学者の視線と一体のものであることにここで改めて気がついたのでした。それは、愛をもって世界の成り立ちをまなざす姿勢にほかなりませんでした。

振り返れば、岩根先生とご一緒できた短い時間のひとつひとつが、今の私を生かす励ましであったことを感じます。フランス文学を専攻する学生として、幸いにも多く機会を重ねる幸運に恵まれましたが、その感懷は、広くフランス語との出会いをもった他学部の学生たちにとっても同様であったことと思います。初めて出会う文法規則や動詞活用に関心しながらも、時に素直な笑顔をこぼしていた

彼らの様子を思い出します。私たち学生に、岩根先生はいつも言葉以上の教えをくださいました。本当にありがとうございました。

これまでのご功労に敬意を表し、心より感謝申し上げますとともに、今後も先生より多くの学びの機会をいただけますことを祈念いたしております。

(博士前期課程修了 (2015 年))



クサイチゴの花  
(法経講義棟北側 20180407)



ヤマガラとハナミズキ  
(文学部西側 20161108)



アオサギの親分 (中山池 20140128)



ネジバナ (文学部中庭 20140627)

## 岩根久先生 思いやりの人

山上 浩嗣

岩根久先生と接するたび、心の温かさに触れてほっとする。思い出すことを振り返ってみよう。

フランス語文法教科書の編集会議の席で、新入りの私は、よく複雑すぎる例文をもち出して訂正を求められた。たとえば、Si j'avais été plus prudente à l'époque,

je ne me serais pas mariée avec mon époux. のような文だ。それでも岩根先生はたいてい、むしろ状況を想像して面白がってくれた。

ある日、とても嬉しそうに「今日は〇〇君が授業に来てくれたんですよ」とおっしゃった。めったに出席しない学生のことを、いつも気にかけておられたのだ。岩根先生はこうに、人の失敗や非礼を決して責めないどころか、美点を見つけようとされる。

ある寒い朝、出勤すると、岩根先生が紙コップのコーヒーを持って中山池のほとりに佇んでおられた。私もコーヒーを買ってきて合流すると、いつも見るサギが一羽足りないと教えてくれた。その一羽が飛来するのを待っておられたのだった。キャンパスに池があることのすばらしさに気づかされた。

岩根先生は日本ロンサール学会の運営に長年にわたり、2012年以後は現在に至るまで会長として尽力されている。とりわけ国際雑誌『ロンサール研究』刊行維持のためのご苦労は並大抵ではない。岩根先生はその最近号に、前幹事長のある方の追悼文を寄稿されたが、悲しみと故人への敬愛に満ちた回想の言葉に胸が詰まった。お人柄が表れた文章だった。

岩根先生は酒がお好きで、店もよくご存じだった。酒飲みというのではなく、一杯一杯をきちんと味わって飲まれる。そして、案内してくださるどの店でも、その名物や個性を詳しく教えてくださる。何十年来のなじみという店にも何軒かご一緒させてもらった。岩根先生にとって、店との付き合いは人付き合いと同じなのだ。相手を尊重し、相手から信頼される。そのような関係が店との間にも築かれていた。先日は、ある宴会からの帰路たまたま二人になり、「もう一軒どうですか」と、蛭池駅近くの小さな立ち飲みの日本酒店に連れて行ってもらった。高級ではないが旨い酒を豊富に揃えた、気さくな店だった。私も大いに気に入った。

以前に拙著を献呈したら、そこに引用した、ミクロコスム（人間）とマクロコスム（世界）の照応に言及しているデュ・バルタスの詩句（«Et bref l'homme n'est qu'un abrégé du monde, / Un tableau raccourci, que sur l'autre Univers»）に關連して、次のロンサールの一節を教えてくださいました。

Les Etoilles adonc seules se firent dames  
Sur tous les corps humains, & non dessus les ames,  
Prenant l'Occasion à leur service, à fin  
D'exécuter çà-bas l'arrest de leur destin.

「星々の賛歌（Hymne des Astres）」という題だそう。ロンサールにこんなに哲学的な詩があったのかと目を開かされた。岩根先生によると、se faire dame という表現は、「影響を及ぼす」という意味らしい。なぜ dame なのだろう。手元の辞書では分からなかった。今度岩根先生に尋ねてみよう。遅れてルネサンスの時代に興味をもった私には、ほかにも教えを請いたいことがたくさんある。

理学部ご出身で、ロンサールに魅せられて仏文に來られたという岩根先生。にこやかで穏やかなお姿のなかに、静かに情熱を燃やしておられる。ご退職後はこ

れまで以上に研究に取り組まれることだろう。岩根先生、これまでありがとうございます。今後のますますのご健勝を祈念いたします。

(大阪大学教授)

## 岩根さんとの思い出

吉井 亮雄

岩根さんとは、同期のフランス政府給費生としてパリ＝ソルボンヌに留学していた和田さんからの情報で、知り合う前から親近感を抱いていた。私たちに1年遅れて1983年の秋、国際大学都市（日本館）の住人となった彼とはすぐに仲良くなり、爾来交流の深まりとともに、私や同行していた妻にとって掛け替えのない友人関係を築いた。すでに40年近い付き合いになる。

岩根さんは理学部高分子学科を卒業後、大学院は仏文学専攻に進学したという「変わり種」で、私たちとはことなり科学部門のフランス政府給費生としてパリ第7大学に留学してきた。ルネサンス期の代表的詩人ロンサールを専門とし、いち早く「文理融合」を実践していたのである。私自身はその方面にまったく疎いので軽々なことは言えないが、岩根さんが古い時代の文学を研究対象としながら、ややもすると単なる印象に依りがちな読解を排し、いかにも理系出身らしく「多変量アプローチによるテキストの計量研究」なるものを粘り強く続けるその潔さには畏敬の念すら覚えてしまう。

当然のことながらアンフォルマティックにかんする知識・経験は半端ではなく、お世辞抜きでプロ級のレベル。私はパソコンやインターネットのトラブルに見舞われるたびに助けてもらってきた。どんなに夜遅く電話で泣きついて、いつも快く解決策を示してもらえるので、さぞや迷惑だろうとは思いつつも、つつい甘えてしまう。本当にありがたいことと感謝に堪えない。

さて、ここからは早くも留学中の遊びの話——。別項「和田さんとの思い出」でも触れたが、それまでトランプが中心だった私たちのカード遊びに花札を持ち込んだのは岩根さんだった。いつもしていたのは最もポピュラーな「花合わせ」、俗にいう「バカッ花」だが、一緒に行った旅先の浜辺などでこれに興じていると、地元の子供らが興味深そうに寄ってきて周りを囲んだものだ。帰りの列車では、岩根さん・和田さんと私たち夫婦が向かい合わせの4人席に陣取り、パリ到着直前まで憑かれたように札を捲り合った。

岩根さんは外国人とも花札をしたようだが、驚くなかれ、そのさい彼らのあいだでは岩根さん考案の術語がちゃんと流通していたのである。たとえば、点札を相手に流し、自分は一切とらずに逃げ切る貧乏技「ふけ」は「レヴォリュション」（お見事!）、また山上の赤い夜空に浮かぶ満月でお馴染みの20点札は巨大な禿頭

に擬して「ミシェル・フーコー」、等々。

岩根さんは、私の愚にもつかぬ駄洒落や標語モドキをことのほか喜んでくれた。私自身は覚えておらず、はるか後になって岩根さんから聞かされた話だが、息子可愛やでパリまで訪ねてこられた母上が帰国なさった後、私がヒサシ君はどうしてるかなと部屋を覗いてみると、寂しがる様子など微塵もなく好物の葡萄パンを無心に食べていた。そこで「ふーん、なんだ」との思いから、ふと私の口を突いて出たのが、「親はなくとも葡萄パン」という下二句モドキだったらしい（岩根さんがこれを長く記憶にとどめていた理由が私には今ひとつ分からないのだが）。また教職に就いてからは、イギリス立憲君主制の原則「君臨すれども統治せず」をもじった戯れ言「休講すれども補講せず」（もちろん冗談です）なども大いに受けた部類。ほかにも岩根さんに気に入ってもらったネタは少なくないが、どれも大方の翬感を買いそうなものばかりなので、この辺りで止めておこう。

岩根さんは戯画の名手でもあった。画用紙に描いた色々な人物画を日本館各階の共同キチネットにゲリラ的に貼り出していたが、なかでもピノッキオ人形を模して身近な友人を描いた「ワダッキオ Wadakkio」は、まさにこれを見れば笑うしかないという傑作だった（現在は家宝として拙宅に大切に保存されている）。

秀でた研究業績にくわえ、その人柄で誰からも愛されていた岩根さんは、滞仏わずか1年半で助手として母校に呼びもとされ、以後、言語文化部（現・大学院言語文化研究科）において講師・助教授・教授と順調に昇進してゆくことになる。岩根さんの帰国には寂しい思いをしたが、やがて彼は毎夏パリに「帰ってくる」ようになり、対面での交流も復活。またその後も、奥方の美千香さんを伴い、現在まで一度も途切れることなく毎年パリ出張・研修を重ね、その研究成果を次々と公表している。私たち夫婦も毎年パリに出かけているので、彼の地での再会・合流も多く、また日本では和田さんともども旧交を温める機会も少なくない。

岩根さんには私が勤務していた九大仏文の集中講義を2度ほど担当してもらったが、楽しい弁舌巧みな講義は出席した学生たちから大好評だった。彼が教え上手なのは、阪大のフランス語教育において抜群の人気を誇ることも明らかで、教場内外で教育方法の工夫・向上を心がける努力には頭が下がるが、学生たちが強く惹かれるのは、そういった技術的な面にもまして、何よりも岩根さんのパーソナリティがあったからこそ。このことは岩根さんの人間的な魅力に接してきた長年の友人として憚りなく断言できるところである。

とまれ、このたびの無事定年は何にもまさる祝着、かくて公務を離れ気楽な身となるからには、岩根さん、あの頃のようにたわいもないバカ話をしながら、また一緒に遊ぼうではありませんか。

（九州大学名誉教授）

## 岩根先生の思い出

涌井 萌子

大学に入って初めてフランス語を始めた私にとって、最初のフランス語の挫折は岩根先生の「フランス語選択」であったように思う。火曜3限の体育の授業が終わった後の4限、サイバーメディアセンターのパソコン室で受講していたのだが、ここで行われたパソコンを使ったフランス語の授業の記憶はほとんど「脊髓反射になるまでに身につけていないと合格できない動詞活用のテスト」と「一度目が不合格で、先生の研究室に再試を受けに行った単語テスト」しか残っていない。今となっては感謝しかないのだが、当時は火曜日のその時間を内心憎々しく思っていたことをここに告白しておく。

一方、フランス文学を学ぶ上でこれほど恵まれた環境はないと歓喜したのもまた岩根先生の授業だった。それは、ロンサルを主に扱った「フランス文学講義」の授業で、受講者が実質質ひとりだったので林千宏先生が参加してくださり、先生二人に学生一人という夢のような環境で、私が毎回何とか訳してきた読めたのか読めていないのか怪しいロンサルの『恋愛詩集』をたたき台に、先生方が議論をされたり、私の素朴な疑問に答えて下さったりした。お二人の先生方の豊富な知識が遺憾なく注ぎ込まれたこの授業のことを、私は一生忘れないだろう。通常「受講生がたった一人しかいない」なら開講しないことを決めてもおかしくないのに、知的好奇心を大いに刺激するこの学習機会を結局、一学期間ずっと設け続けて下さったことには感謝してもしきれない。意欲のある学生に対して温かいというのは分野問わずどこでも見られる光景なのかもしれないが、岩根先生を含めフランス文学に関わっていらっしゃる先生には特に多いように思われる。

この一年、岩根先生・林先生が携わっている故高田勇先生の蔵書整理のお仕事にお手伝いさせていただく機会が数回あったのだが、作業をする箕面キャンパスとの間の行き帰りの車内でも、作業をする本と段ボールだらけの部屋でも、先生が研究で本を読まれるときのメモの付け方から人文科学研究や文学・歴史学研究の在り方まで、様々な話題についてお話下さった。特に、ICTをいち早く言語教育・文学教育に取り入れていらっしゃる先生のお話は、教員免許を持ち、教育現場で学んだことを誰かに教え伝えるということに興味のある私にとってはかなり刺激的だった。学生が先生から、研究指導以外の場でこれほど多岐にわたる話を一対一で聞ける機会は稀少であり貴重でもある。超少人数授業についてもこの蔵書整理についても、私は随分幸せな学生だったのだと改めて感じているが、その場を設けて下さったのは他ならぬ岩根先生であり、受けた恩を十分に返すことのないまま先生を見送ることになる。先生なら「次に渡せばいい」と笑っておっしゃいそうだが、せめて少しでも恩に報いることができるとしたらこの場で有り余る

感謝の意を伝えることだろうと思い、稿を寄せた次第である。

(大阪大学博士前期課程在学中)